

田川市文化財調査報告書第13集

経塚遺跡Ⅱ

福岡県田川市経塚遺跡2次・3次発掘調査報告書

2011

田川市教育委員会

田川市文化財調査報告書第13集

経塚遺跡Ⅱ

福岡県田川市経塚遺跡2次・3次発掘調査報告書

2011

田川市教育委員会



経塚道跡遠景（上空から）



北1号墓群（北上空から）



西側斜面全景（北西上空から）



経塚遺跡全景（調査後、上空から）

序

かつて田川市は、日本の近代化を支えた石炭とともに栄えた都市でした。しかし、石炭産業以前の歴史についても、貴重な文化遺産が数多く所在しています。

今回調査を行った経塚遺跡は、速賀川流域では有数の規模をもつ横穴墓群として、広く知られています。開発により遺跡の一部について現状保存が困難となったため、消滅する部分について、記録保存を目的とした発掘調査を行い、この報告書を刊行いたしました。

貴重な埋蔵文化財が消滅することは残念ですが、今回の調査が田川地方の古代史の解明に資することがあれば、幸いに存じます。

発掘調査および本書作成にあたり、指導助言をいただきました方々、作業に従事していただきました皆様、そして何よりも、本市の文化財保護行政にご理解いただきました土地所有者及び地元関係者の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

田川市教育委員会
教育長 尾 垣 有 三

例 言

1. 本書は、平成15年度（2次調査）及び平成18年度（3次調査）に田川市教育委員会が実施した経塚遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書である。
2. 経塚遺跡は、平成8～9年度（1次調査）に発掘調査を行った「経塚横穴墓群・古墳群」（田川市教育委員会1999『経塚横穴墓群・古墳群』田川市文化財調査報告書第9集）と同丘陵上に所在する一連の横穴墓群だが、今回の調査で横穴墓・古墳以外の遺構が検出されたため、「経塚遺跡」とした。
3. 本書に掲載した遺構実測図は、田代健二、福本寛、藤島志考、本多史佳が作成した。
4. 本書に掲載した遺物実測図は、田代、福本、中川恭子が、製図は中川が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真は田代、福本が、遺物は田代が行った。
6. 遺物の整理復元は、中川が行った。
7. 出土遺物、写真、実測図は全て田川市石炭・歴史博物館で保管している。
8. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
9. 本書のうち、第1章及び第2章の3次調査分の遺構を田代が、その他は福本が執筆した。本書の編集は、博物館職員の協力を得て、福本が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と調査体制	1
第2節 経塚遺跡周辺の地理的・歴史的環境	2
第2章 調査の記録	6
第1節 調査の経過	6
第2節 横穴墓	8
1 北1号墓群	8
2 西A号墓群	14
3 西B号墓群	17
4 西C号墓群	23
5 西D号墓群	33
6 東A号墓群	45
第3節 墳丘	51
1 1号墳丘	51
2 5号墳丘	55
第4節 箱式石棺墓・石室土槨墓・土槨墓	56
1 箱式石棺墓	56
2 石室土槨墓	56
3 土槨墓	61
第3章 まとめ	70

図版目次

巻頭図版 1	経塚遺跡遠景（上空から） 北1号墓群（北上空から）
巻頭図版 2	西側斜面全景（北西上空から） 経塚遺跡全景（調査後、上空から）
図版 1	北1号墓群 北1-1号墓玄室 北1-2号墓
図版 2	北1-3号墓玄室 西側斜面（調査前） 西A-1号墓道（東から）
図版 3	西A-1号墓玄室 西B-1号墓道遺物出土状況① 西B-1号墓道遺物出土状況②
図版 4	西B-1号墓道遺物出土状況③ 西B-1a号墓玄室 西B-1a号墓・B-1b号墓
図版 5	西B-1b号墓 西B-1b号墓・B-2号墓 西B-2号墓玄室
図版 6	西C-1号墓道土層 西C-1号墓羨門 西C-1号墓玄室①
図版 7	西C-1号墓玄室②（玄室から羨道） 西C-2号墓道上層 西C-2a号墓検出状況
図版 8	西C-2a号墓羨門 西C-2a号墓玄室
図版 9	西C-2c号墓検出状況 西C-2b号墓・C-2c号墓 西D-1号墓道土層
図版 10	西D-1号墓検出状況 西D-1号墓羨門 西D-1号墓玄室①
図版 11	西D-1号墓玄室②（玄室から羨道） 西D-2号墓道土層 西D-2a号墓検出状況

図	版 12	西 D-2a 号墓羨門 西 D-2a 号墓玄室① (前室・玄室)
図	版 13	西 D-2a 号墓玄室② (玄門部の裝飾) 西 D-2b 号墓
図	版 14	西 D-2c 号墓 西 D-3 号墓羨門
図	版 15	西 D-3 号墓道土層 西 D-3 号墓羨道 西 D-3 号墓玄室①
図	版 16	西 D-3 号墓玄室② (玄室から羨道) 東 A-1 号墓群 東 A-1a 号墓
図	版 17	東 A-1b 号墓 東 A-1c 号墓・A-1d 号墓 東 A-1e 号墓
図	版 18	東 A-1 号墓群・A-2 号墓群 東 A-2 号墓群 1 号墳丘土層
図	版 19	1 号墳丘北側墳端部 1 号墳丘東側墳端部 1 号墳丘 (調査後)
図	版 20	1 号墳丘盛土遺物出土状況 1 号・5 号墳丘盛土土層 5 号墳丘 (調査後、南から)
図	版 21	1 号箱式石棺墓検出状況 1 号箱式石棺墓蓋石除去状況 1 号箱式石棺墓鉄器出土状況
図	版 22	1 号石蓋土墳墓検出状況 1 号石蓋土墳墓蓋石除去状況 2 号石蓋土墳墓検出状況
図	版 23	2 号石蓋土墳墓蓋石除去状況 3 号石蓋土墳墓検出状況 3 号石蓋土墳墓蓋石除去状況
図	版 24	4 号石蓋土墳墓検出状況 4 号石蓋土墳墓蓋石除去状況 1 号土墳墓
図	版 25	北 1 号墓・西 A-1 号墓・西 B 号墓出土土器
図	版 26	西 B 号墓・西 B-1 号墓・西 B-2 号墓・西 C 号墓①出土土器
図	版 27	西 C 号墓②出土土器
図	版 28	西 C 号墓③・西 C-1 号墓出土土器
図	版 29	西 C-1 号墓・西 C-2 号墓・西 B～C 号墓・西 D-1 号墓①出土土器
図	版 30	西 D-1 号墓②・西 D-2 号墓・西 D-3 号墓①出土土器
図	版 31	西 D-3 号墓②出土土器
図	版 32	西 D-3 号墓③・西 D-2～3 号墓・西地区・東地区出土土器
図	版 33	1 号墳丘トレンチ①出土土器
図	版 34	1 号墳丘トレンチ②出土土器 作業風景 (2 次調査)
図	版 35	北 1 号墓・西 B-2 号墓①出土鉄器
図	版 36	西 B-2 号墓②出土遺物・西 C-2a 号墓①出土鉄器
図	版 37	西 C-2a 号墓②・西 D 号墓出土鉄器・西 D-3 号墓出土遺物
図	版 38	墳丘トレンチ・1 号箱式石棺墓・1 号石蓋土墳墓・表採出土鉄器

挿 図 目 次

第 1 図	調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
第 2 図	調査地位位図 (1/2,500)	6
第 3 図	経塚遺跡遺構配置図 (1/250)	7
第 4 図	北 1 号墓群実測図 (1/60)	9
第 5 図	北 1 号墓道土層断面図 (1/60)	10
第 6 図	北 1 号墓道出土土器実測図 (1/3・1/6)	10
第 7 図	北 1 号墓出土鉄器実測図 (1/2)	11
第 8 図	北 1-1 号墓玄室実測図 (1/60)	12

第9图	北1-3号墓玄室实测图 (1/60)	13
第10图	西A-1号墓实测图 (1/60)	14
第11图	西A-1号墓出土土器实测图 (1/3)	15
第12图	西B号墓群实测图 (1/60)	16
第13图	西B号墓前庭部出土土器实测图 (1/3)	17
第14图	西B-1a号墓实测图 (1/60)	18
第15图	西B-1b号墓实测图 (1/40)	19
第16图	西B-1号墓出土土器实测图 (1/6)	19
第17图	西B-2号墓实测图 (1/60)	20
第18图	西B-2号墓玄室出土土器实测图 (1/3)	21
第19图	西B-2号墓玄室出土铁器实测图① (1/2)	21
第20图	西B-2号墓玄室出土铁器实测图② (1/2)	22
第21图	西B-2号墓出土遗物实测图 (2/3)	22
第22图	西C号墓群实测图 (1/60)	24
第23图	西C号墓道~前庭部出土土器实测图① (1/3)	25
第24图	西C号墓道~前庭部出土土器实测图② (1/3)	26
第25图	西C-1号墓实测图 (1/60)	27
第26图	西C-1号墓出土土器实测图 (1/3 · 1/6)	28
第27图	西C-2a号墓实测图 (1/60)	29
第28图	西C-2号墓道及びC-2b号墓出土土器实测图 (1/3 · 1/6)	31
第29图	西C-2a号墓玄室出土铁器实测图 (1/2)	31
第30图	西C-2b · 2c号墓实测图 (1/40)	32
第31图	西B · C号墓群出土土器实测图 (1/3)	32
第32图	西D号墓群实测图 (1/60)	34
第33图	西D-1号墓实测图 (1/60)	35
第34图	西D-1号墓道土層断面图 (1/60)	36
第35图	西D-1号墓道~前庭部出土土器实测图 (1/3 · 1/6)	36
第36图	西D-2号墓道土層断面图 (1/60)	37
第37图	西D-2a号墓实测图 (1/60)	38
第38图	西D-2号墓道~前庭部出土土器实测图 (1/3 · 1/6)	39
第39图	西D-2a号墓天井实测图 (1/60)	39
第40图	西D-2a号墓玄室流入土出土土器实测图 (1/3)	40
第41图	西D-2b · 2c号墓断面实测图 (1/40)	40
第42图	西D-3号墓实测图 (1/60)	41
第43图	西D-3号墓道土層断面图 (1/60)	42
第44图	西D-3号墓道~前庭部出土土器实测图 (1/3 · 1/6)	43
第45图	西D-3号墓玄室出土土器实测图 (1/3)	44
第46图	西D-3号墓玄室出土遗物实测图 (2/3)	44

第47図	西D号墓出土鉄器実測図 (1/2).....	44
第48図	西D-2・3号墓前庭部出土土器実測図 (1/3).....	44
第49図	西地区表採遺物実測図 (1/3).....	45
第50図	東A号墓道出土土器実測図 (1/3).....	45
第51図	東A号墓群実測図 (1/60).....	46
第52図	東A-1号墓実測図 (1/60).....	47
第53図	東A-1号墓道土層断面図 (1/60).....	48
第54図	東A-1号墓小横穴実測図 (1/40).....	49
第55図	東A-2号墓小横穴実測図 (1/40).....	50
第56図	東地区表土除去中出土土器実測図 (1/3).....	50
第57図	1号墳丘トレンチ土層断面図 (1/60).....	52
第58図	1号墳丘トレンチ出土土器実測図① (1/3).....	53
第59図	1号墳丘トレンチ出土土器実測図② (1/3・1/6).....	54
第60図	墳丘トレンチ出土鉄器実測図 (1/2).....	54
第61図	5号墳丘トレンチ土層断面図 (1/60).....	55
第62図	1号箱式石棺墓出土鉄器実測図 (1/2).....	56
第63図	1号箱式石棺墓実測図 (1/30).....	57
第64図	1号・2号石蓋土墳墓実測図 (1/30).....	58
第65図	1号石蓋土墳墓出土鉄器実測図 (1/2).....	59
第66図	3号石蓋土墳墓実測図 (1/30).....	59
第67図	4号石蓋土墳墓実測図 (1/30).....	60
第68図	1号土塼墓実測図 (1/30).....	60
第69図	2次調査表採土器実測図 (1/3).....	61
第70図	3次調査表採土器実測図 (1/3・1/6).....	61
第71図	表採鉄器実測図 (1/2).....	62

表 目 次

第1表	土器等観察表.....	63
第2表	鉄器観察表.....	69
第3表	耳環・玉類観察表.....	69

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査体制

平成14年10月、田川市大字伊田2011外で、雑木除去のための土地掘削の計画がある旨の連絡が市教委文化課へあった。市教委文化課は、当該地は経塚横穴墓群の所在地であることから、遺跡を現状のまま保存してほしいが、どうしても必要であれば最小限の工事にとどめるようお願いした。

平成15年9月、地権者代理者より、丘陵部での工事中に、横穴墓が見つかったとの連絡が文化課へあり、横穴墓の位置図を渡し、横穴墓を避けて工事するようお願いした。さらに、今後の方針については、当面測量調査を行って横穴墓の詳細な位置を把握した上で、開発により破壊が免れない部分については発掘調査を行うが、極力部分的な調査に留めて遺跡を保護したい旨を伝えた。

同年11月、測量調査を実施。

平成16年3月1日より3月31日まで、開発により崩壊の危険が高いと判断した丘陵先端部の横穴墓について、市教委が国庫補助を受け緊急調査を行った（2次調査）。

平成17年4月、地権者代理者より、当該地に個人医院を建設する計画がある旨の連絡があった。市教委文化課は地権者代理者と協議をし、文化財保護の観点から、極力現状のままの保存について協力をお願いしたが、結果としては、現状保存は難しいとの結論になった。とりあえず次年度に本調査に先立ち経塚遺跡の範囲確認調査を行うことにし、国庫補助事業計画を提出した。

平成18年9月、地権者代理者より、早急に工事に入れるようにしてほしいとの連絡があった。地権者代理者、県文化財保護課、市教委文化課で協議した結果、調査計画を変更し、工事予定部分について本調査を行うことになった。同月、計画変更承認申請書提出。

平成18年12月1日、現地調査を開始し、翌年5月31日終了した（3次調査）。

なお、調査及び報告書作成にかかる関係者は以下のとおりである。

総 括	田川市教育委員会	教 育 長	月森清三郎（平成15年度）
			柏木 順子（平成18年度）
			尾 垣 有 三（平成22年度）
		教育部長	中村 輝 昭（平成15年度）
			荒 尾 徹（平成18年度）
			万 田 龍 生（平成22年度）
田川市教育委員会文化課		課 長	新 具 重 信（平成15年度）
			古 木 一 次（平成18年度）
			中 野 辰 生（平成22年度）
		課長補佐	林 晋 一（平成15・18年度）
			田 籠 均（平成22年度）
		文化係 係 長	新具れい子（平成18年度）
			城 野 昭 憲（平成22年度）

田川市教育委員会文化課石炭・歴史博物館	館長	佐々木哲哉（平成15年度） 安 植 龍 生（平成18・22年度）
	係長	森 本 弘 行（平成15年度）
	主任	綿施美和子（平成22年度）
報告書作成		田 代 健 二（平成22年度）
報告書作成		福 本 寛（平成22年度）
2次調査担当	主 事	福 本 寛（平成15年度） 坂 本 明 美（平成15年度）
3次調査担当	主 事	田 代 健 二（平成18年度）
	嘱 託	中 川 恭 子（平成22年度） 宮 原 美 保（平成22年度） 大 木 公 弘（平成22年度）

調査指導 福岡県教育庁筑豊教育事務所	主任技師	杉 原 敏 之（平成15年度）
	主任技師	吉 田 東 明（平成18年度）
	技術主査	宮地聡一郎（平成22年度）
福岡県教育庁文化財保護課調査第一係		

発掘調査及び整理作業に従事していただいた方々

甘村源一、大平幸子、大平雄三、大木千恵子、神田節子、北崎 優、白山和子、堤 明治、永田芳延、中藤哲生、中前良子、中村金蔵、中村研司、中村正己、中村陽典、西岡寿枝、西岡義雄、西村重美、野口拓爾、野崎和義、平山正信、藤島志考、本多史佳、松本成玄、宮原裕美子、室井朱美、室井洋一、元田義久、吉岡淳子、吉田美由紀（五十音順、敬称略）

なお、発掘調査については、土地所有者、山本建設（地元関係者）に多大なご理解とご協力をいただきました。あわせて、野村憲一（春香町教育委員会）、井上勇也（福智町教育委員会）、八木健一郎（飯塚市教育委員会）、筑豊教育事務所管内市町村文化財担当者および田川地域文化財ボランティアの会をはじめとして、多くの方々からご指導ご協力をいただきました。感謝の意を表します。

第2節 経塚遺跡周辺の地理的・歴史的環境

経塚遺跡の所在する山川地方は、福岡県の中央からやや東に寄った位置にあり、いわゆる筑豊地方の東南部にあたる。地形的には、川沿いの平野部が北西にわずかに開けている他は、南部の英彦山地、東部の貫山地、西部の金国山地、北部の福智山地に囲まれた盆地地形であり、周辺地域との交通は、金辺峠（北東：⇨豊前国企求郡）、仲哀峠（東：⇨豊前国京都郡）、烏尾峠（西：⇨筑前穂波郡）、猪熊峠（西：⇨筑前嘉麻郡）、薬師峠（南：⇨豊前国中津郡）砥石峠（南：⇨筑前国朝倉郡）他の各峠を通じて行われていた。

盆地底には、南部の英彦山地から延びる二条の丘陵帯がある。この二つの丘陵帯は古第三紀層

を基盤としており、層中に豊富な石炭層を含み、筑豊炭山の一部を形成している。この基盤の上に更新世末期の阿蘇山の噴火によりもたらされた火山灰が堆積し、灰石台地を形成している。この台地上は旧石器時代から利用が始まり、現在も居住・生産の場として利用されている。水系では盆地の大部分が遠賀川水系の上流部にあたり、英彦山に源を発する彦山川、中元寺川及び香春岳に源を発する金辺川・御蔵川が北流し、直方市内で遠賀川本流に合流する。赤村を流れる今川のみは遠賀川水系ではなく、東流し周防灘へ注ぐ。これらの河川による堆積作用により、盆地内の丘陵部は複雑に入り組んだ地形を呈する（註1）。

経塚遺跡は、彦山川西岸の低丘陵状に位置している。東は、彦山川の沖積地を隔てて東岸の台地・低丘陵と向き合う、西には盆地中央部の低丘陵が連なる。彦山川沿いの両岸には、同様の低丘陵・台地が連なっている。以下、この遺跡の属する古墳時代前後における周辺の遺跡について述べる。

弥生時代末から古墳時代初期の遺跡として、香春町宮原遺跡では石棺墓から後漢代の内行花文鏡、小型仿製鏡など4面の銅鏡が出土している（註2）。また、田川市大字伊加利の伊加利古墳（?）では箱式石棺墓から内行花文鏡が出土している。夫婦塚古墳群は、彦山川東岸の台地上に位置し、コ字形の列石の内外に複数の箱式石棺が検出された（註3）。主体部と見られる大型の箱式石棺は両小口外に接して板石を水平に配置しており、特異である。前方後円墳が広まる以前の墳墓の一例と考えられる。特に、夫婦塚古墳群（墳墓群）では区画の存在が明らかであり、無区画墓→区画墓への流れを見ることができる。

中元寺川流域の田川市大字位登に所在する位登古墳は、前期古墳としては山川地方で唯一の前方後円墳である。昭和9年の報告（註4）で、後円部中央の箱式石棺から小型仿製鏡、管玉、鉄刀片が出土したとあり、平成13年度の緊急調査では、主体部の箱式石棺と人骨を確認している。

同橋の彦山川西岸に位置する長谷池6号墳（註5）は、低平な楕円形の墳丘上に2基の箱式石棺があり、石棺内から小玉が出土している。旧方城町（現福智町）の迫古墳（註6）では小規模な墳丘上に木棺粘土槨の主体部が築かれているが、副葬遺物は出土していない。経塚3号墳（註7）は、木棺粘土槨を中心主体とする円墳で、直行名文双葉（鳳）文鏡1点と各種の鉄器類が出土した。この他、金辺川北岸に位置する田川市大字夏吉の若八幡古墳群、大字端の金辺川南岸の天神山古墳群に低平な墳丘の前期古墳と見られるものがあるが、未調査である。

中期古墳としては、市内上伊田に所在する箱迫1号墳（註8）、セストノ古墳（註9）が代表的である。両者とも、大型の板石を壁面構築材として使用しており、他地域では見られない特徴をもち、韓国大邱地方の影響が指摘されている（註10）。箱迫1号墳の墳裾からⅣ期の円筒埴輪と馬形・武人形埴輪が出土し、また、TK73期の須恵器が出土している。セストノ古墳は、墳丘径37mの大型円墳で、周壕と周堤を有する。主体部は未発掘で、多量の遺物が出土しているほか、周壕からⅤ期の埴輪片が出土している。香春町長畑1号墳（註11）は墳丘・石室とも人破しており不明な点が多いが、金製垂飾付耳飾が出土しており、中期古墳と考えられる。同じく香春町の小倉古墳（註12）は、石室形態から見て、これも中期古墳の範疇に入ると考えられる。

古墳時代後期、須恵器九州編年でⅢ期以降になると河岸の丘陵上に多数の横穴墓群が形成される。特に、経塚遺跡が所在する田川市大字伊田と大字伊加利の境界付近から上流の彦山川両岸の丘陵上には密に分布する。横穴墓の中には墳丘を有するものもある。大任町狐塚1号墳（註13）は、中・後期においては田川盆地内で唯一の前方後円墳であるが、主体部が横穴墓である可能性が高い。墳

丘を伴う横穴墓は、市内長谷池横穴墓群（註14）、大任町稻荷山横穴墓群（註15）、直方市水町遺跡（註16）などでも発見され、遠賀川流域では特殊な存在ではないことがわかってきた。

横穴式石室墳については、市内夏吉の夏吉古墳群（註17）に40基前後の集中が見られ、その他は、田川郡内の広い地域に1～数基の小古墳群が点在する。数では圧倒的に横穴墓が優越することがこの地域の特徴といえる。石室墳の中には、蘇尾古墳のように横穴墓群の中に位置するものもあり、両者の関係が注目される。

- 註1 塚本勇二 1974「第一篇 田川市の自然地理」『田川市史 上巻』田川市史編纂委員会
- 註2 福岡藩・花村利彦 2001「第二編原始古代第二章弥生時代」『香春町史 上巻』香春町史編纂委員会
- 註3 花村利彦 1974「第二篇 先史時代」『田川市史 上巻』田川市史編纂委員会
- 註4 小方泰宏・長谷川清之 1982「位登古墳測量調査報告」『田川歴史資料集（1）一古墳時代編一』、青木庄一郎 1934「豊前諸位金村位登古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第9集
- 註5 田代健二 編 1993「長谷池遺跡群」田川市教育委員会
- 註6 浜田信也 編 1977「追古墳」方城町教育委員会
- 註7 田代健二 編 1999「蘇尾横穴墓群・古墳群」田川市教育委員会
- 註8 福本寛 編 2004「龜道1号墳」田川市教育委員会
- 註9 佐田茂 編 1984「セスドノ古墳」田川市教育委員会
- 註10 森下浩行 1987「九州型初期横穴式石室考一畿内型出現以前横穴式石室の概観一」『古代学研究』115
- 註11 野村憲一・水ノ江和同 編 1998「長福遺跡 宮原遺跡 小倉古墳 才立横穴墓 香春町教育委員会
- 註12 註8文獻
- 註13 横山達也 編 1976「狐塚古墳群」大任町教育委員会、横山達也 編 1978「狐塚古墳群Ⅱ」大任町教育委員会、志満紀郎 編 2004「狐塚横穴墓群 明神山城跡」大任町教育委員会
- 註14 註5文獻
- 註15 緒方泉 編 1998「稻荷山横穴墓群」大任町教育委員会
- 註16 田村 裕 編 1997「水町遺跡群」直方市教育委員会
- 註17 小方泰宏 1987「夏吉古墳群の歴史的位置」『郷土田川』30号田川郷土研究会

1. 追古墳、2. 追横穴墓群、3. 追遺跡、4. 宇奈遺跡、5. 幸池遺跡、6. 三本松古墳、7. 人見古墳群、8. 神崎遺跡、9. 飯土井古墳、10. 城山古墳群、11. 下體山古墳、12. 後谷遺跡、13. 伊方古墳、14. 長谷池横穴墓群、15. 野部横穴墓群、16. 芝崎古墳、17. 伊方遺跡、18. 大尾遺跡、19. 法華原横穴墓群、20. 前川遺跡、21. 大穴遺跡、22. 清原横穴墓群、23. 夏吉古墳群、24. 夏吉1号墳、25. 夏吉21号墳、26. 差八幡古墳群・横穴墓群、27. クナタ山古墳、28. 一ノ島古墳、29. 香春古城、30. 香春岳二ノ丘遺跡、31. マツボ、32. 長福遺跡、33. 宮原遺跡、34. 河内王墓（陵墓参考地）、35. 中津原横穴墓群（才立横穴墓）、36. 一ノ井古墳群、37. 美ヶ丘遺跡、38. 雲ヶ丘横穴墓群、39. 網ヶ丘遺跡、40. セスドノ古墳、41. 龜道1号墳、42. 龜道2号墳、43. 法光寺遺跡、44. 九州商業学校校庭遺跡、45. 大塚横穴墓群、46. 香春神社古墳、47. 殿ヶ原古墳群・横穴墓群、48. 下伊田遺跡群、49. 水島古墳、50. 榎木横穴墓群、51. 上吉田古墳群、52. 上吉田横穴墓群、53. 丹ヶ原遺跡、54. 山伏塚、55. 上の原古墳、56. 上の原遺跡群、57. 小形横穴墓群、58. 寺ノ上遺跡群、59. 寺の森遺跡、60. 天神前遺跡、61. 天神山古墳群、62. 松ノ木田遺跡、63. 木殿遺跡、64. 門出遺跡、65. 下ノ丘遺跡、66. 倉園遺跡、67. 長谷池遺跡群、68. 向海古墳群、69. 和田古墳群、70. 和田横穴墓群、71. 松山遺跡、72. 松山遺跡、73. 宮山遺跡、74. 宮山古墳群、75. 用遺跡、76. 糸田遺跡、77. 松ヶ道1号墳、78. 松ヶ道2号墳、79. 松ヶ道遺跡、80. 川ヶ崎古墳、81. 古賀ノ墓遺跡、82. 麻道遺跡、83. 堤下古墳群、84. 上糸田遺跡、85. 高木公園古墳、86. 津田古墳群、87. 岩下敷布池、88. 香町敷布池、89. 岩屋古墳、90. 見立穴東古墳、91. 見立古墳、92. 狐ヶ池横穴墓群、93. 角田原古墳群、94. 角田原遺跡、95. 月形田原A遺跡、96. 月形田原B遺跡、97. 月形田原C遺跡、98. 奥布神社古墳群、99. 見立遺跡、100. 法光寺裏4・5号墳、101. 法光寺裏横穴墓群・古墳群、102. 法光寺裏6号墳、103. 大塚横穴墓群・大倉古墳、104. 長福横穴墓群、105. 成道寺石棺墓群A群、106. 成道寺公園内1号墳、107. 成道寺石棺墓群B群、108. 経信川土地区、109. 成道寺公園横穴墓群、110. 榎木遺跡、111. 天台寺跡（上伊田町）、112. 天台寺瓦葺墓、113. 伊田臥屋横穴墓群、114. 上伊田横穴墓群、115. 蘇尾横穴墓群・蘇尾古墳、116. 小児聖徳出土地、117. 大下横穴墓群・伊佐利1号墳、118. 伊佐利2号墳、119. 伊佐利3号墳、120. 城山第1地点、121. 城山第2地点、122. 岩倉横穴墓群・伊佐利4号墳、123. 伊佐利5号墳・6号墳、124. 田中横穴墓群・古墳群、125. 六角堂横穴墓群、126. 伊佐利9号墳、127. 関山横穴墓群・関山古墳、128. 関山横穴墓群、129. 明神山横穴墓群、130. 龍徳寺古墳群、131. 渡ノ池横穴墓群、132. 柳原横穴墓群、133. 渡手横穴墓群、134. 須原横穴墓群・古墳群、135. 丸山古墳、136. 伊田山横穴墓群、137. 須原山横穴墓群、138. 安永横穴墓群、139. 大行寺横穴墓群、140. 西郎郎墓、141. 榎木谷城、142. 大2時神社横穴墓群、143. 野上敷布池、144. 上糸田古墳群、145. 古賀古墳群、146. 下位遺跡、147. 位登古墳、148. 位登横穴墓群、149. 岩鼻古墳、150. 田原遺跡、151. 公門原遺跡、152. 夏加坂遺跡、153. 菊位金古墳群、154. 石濱池西古墳群、155. 田原古墳群、156. 稻原原遺跡、157. 猪位金2号墳、158. 金河遺跡、159. 水井遺跡、160. 月形田1号墳、161. 龍崎遺跡



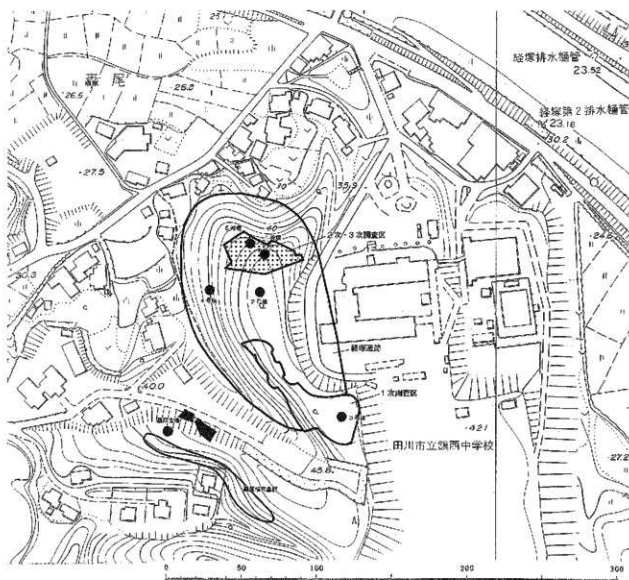
第1図 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000) [国土地理院「田川」行橋より]

第2章 調査の記録

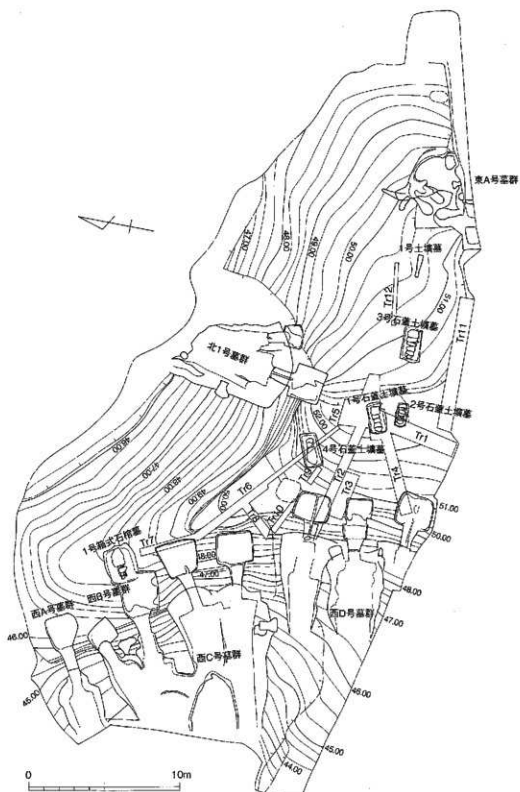
第1節 調査の経過

経塚遺跡は、彦山川西岸の沖積地に突き出た標高約40mの丘陵上に所在する。尾根上には1号～4号の4基の墳丘が確認されており、それを取りまくように150基前後の横穴墓が分布していた。平成8～9年に尾根上の最も南に位置していた墳丘（3号墳）及び南西部の横穴墓35基の調査を行っている（1次調査-註1）。

遺跡所在地は山林であったが、平成15年に遺跡の北側斜面が造成により削られ、1号墳丘の約半分が削平され、横穴墓の入口部分が露出していた。



第2図 調査地位置図 (1/2,500)



第3図 経塚遺跡遺構配置図 (1/250)

平成 16 年 3 月、露出した 3 基の横穴墓（1 基は小横穴）について調査を行うと共に、1 号墳丘にトレンチを設定し、その性格を追及した。その際、1 号墳丘のトレンチ内で石蓋土壌墓 1 基を検出した（2 次調査）。

平成 18 年度は、平成 15 年度の調査により、丘陵頂部の 1 号墳丘が北 1 号墓に伴う墳丘である可能性が考えられたので、その性格の解明から調査にとりかかった。前回調査時のトレンチを拡張するとともに新たにトレンチを増設し、主体部の有無を確認した。また、1 号墳丘から北西にのびる尾根支脈上にトレンチを設定し、遺構の検出を行った。そのトレンチ調査の結果、新たに 5 号墳丘の存在を確認し、また、箱式石棺墓を検出した。

1 号墳丘の調査のめどがついた時点で、東斜面の遺構検出にとりかかると共に、西斜面にトレンチを設定し、横穴墓の分布状況を確認した。その後、重機により西斜面の表土を除去し、各横穴墓の調査を行った。また、1 号墳丘内のトレンチの拡張部分で新たに石蓋土壌墓を検出したので、これも調査した。

西側斜面では、8 基の横穴墓と 5 基の小横穴を検出した。墓道又は前庭部の共有状況から、A ～ D の 4 小群に区分した。各小群は、地山岩盤（軟質砂岩）を掘り残した障壁状の部分によって区分されている。また、東側斜面では、横穴墓 1 基の墓道の一部と小横穴が 8 基検出され A 群としたが、墓道によって 2 つに分かれる。

結果として、2 次調査では、北側斜面で横穴墓 2 基と小横穴 1 基及び石蓋土壌墓 1 基、3 次調査では、西側斜面で横穴墓 8 基と小型横穴墓 5 基、東斜面で横穴墓 1 基の墓道の一部と小型横穴墓 8 基、尾根上で箱式石棺墓 1 基、石蓋土壌墓 3 基、土壌墓 1 基を検出・調査した。あわせて、墳丘 2 基の調査も行った。

註 1 出代健二編 1999『経塚横穴墓群・古墳群』田川市教育委員会

第 2 節 横穴墓

1 北 1 号墓群（第 4 図、巻頭図版 1・図版 1）

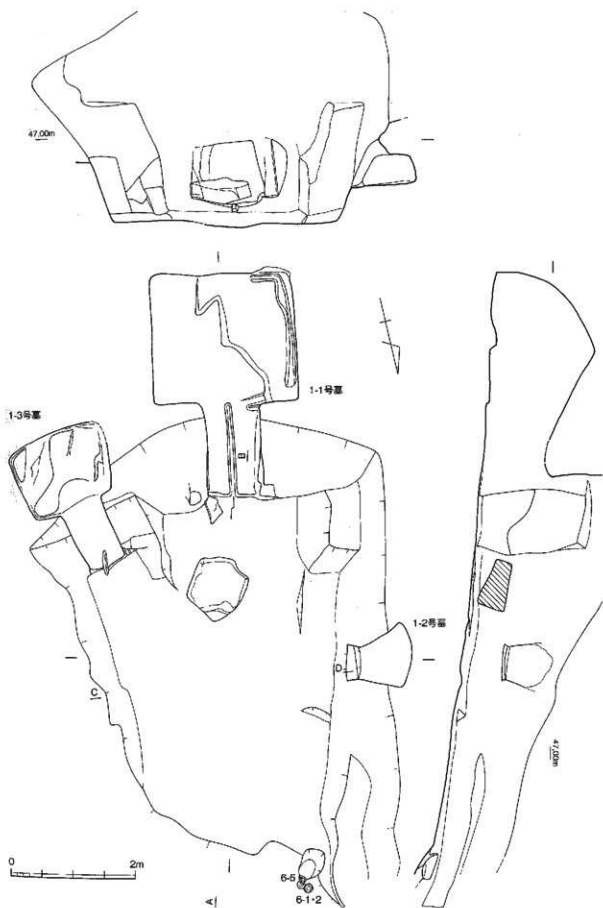
北 1 号墓群は、2 次調査を行った丘陵北側斜面に位置する。北側斜面は土砂採集で北 1 号墓群より低い部分は掘削されたが、立会したところ横穴墓等の遺構は検出されず、北側斜面では当横穴墓以外の遺構は確認されていない。

北 1 号墓群は当初から一部開口しており、掘り下げて全体を確認したところ、一つの墓道に 2 基の墓室（1-1 号・1-3 号墓）が付き、墓道西側側壁には小横穴が 1 基（1-2 号墓）築造されていた。

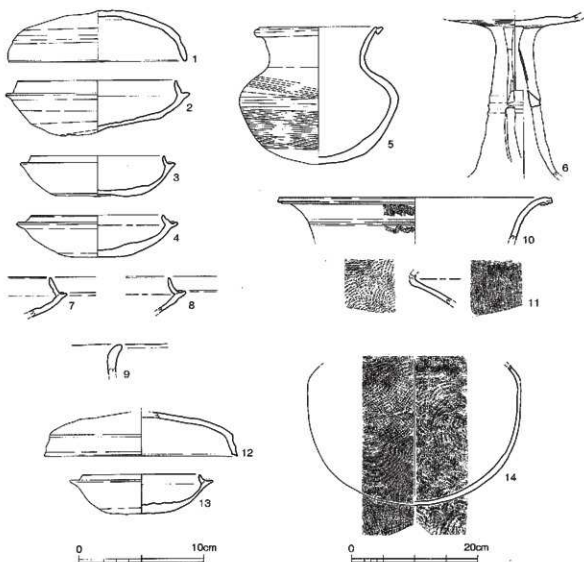
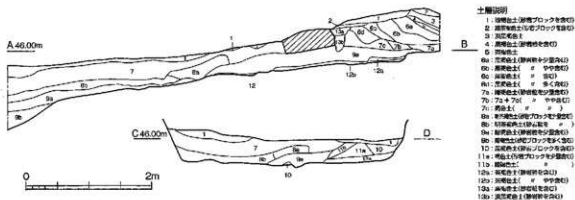
（1）墓道（第 5 図）

墓道は、最大（現存）長 6.55m を測り、N-15°-E の方向に開口する。当初は、主墓室である 1-1 号墓の墓道として、幅 2.1m の墓道が掘削された後、1-1 号墓羨門部両脇に上柱を削り出して、その幅（西側で 0.55m）分拡張したと考えられる。あわせて、墓道東側の 1-3 号墓築造に際しては、幅 0.95m ほどの墓道が追加され、最終的に略羽子板状の形状となった。

墓道は 9°前後の傾斜を持って、ゆるやかに墓室までつながる。1-1 号墓羨門部の両脇には、1.05m



第4图 北1号墓群实测图 (1/60)



の間隔で土柱が1対、岩盤を削りだして築造される。西側土柱は高さ1.8m、東側土柱は1.7mとほぼ高さをそろえているが、東側土柱は1-3号墓築造時に削平を受けている。

閉塞石は全て外されていたが、1-1号墓入口付近で検出された幅1m前後の石が、同墓を閉塞していたと考えられる。また、墓道から土器とともに馬具も出土したが、馬具はおそらく1-1号墓に副葬されていたものと推測される。

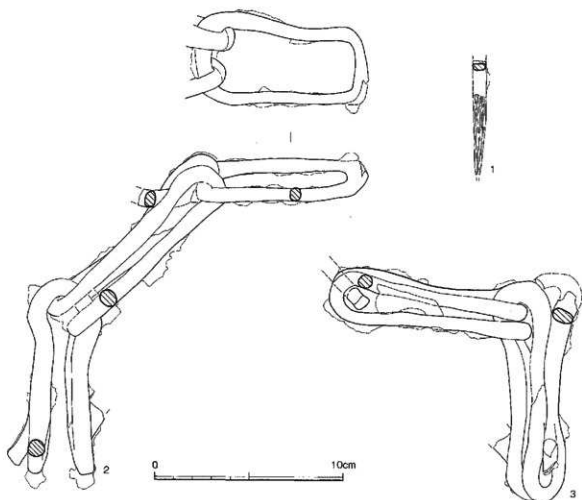
追葬の状況（第5図）

北1号墓道では土層から、追葬の状況を検討した。12層は1-1号墓もしくは1-3号墓の1次追葬にともなう整地層と考えられる。その後1-3号墓道の埋土である11層が堆積しているが、しまりが弱く追葬面かどうかは不明である。11層の上に堆積した9層はしまりが強いことから1-1号墓の2次追葬面と考えられる。したがって、1-1号墓については初葬を除く追葬が2回以上、1-3号墓については1回以上が考えられる。

出土遺物

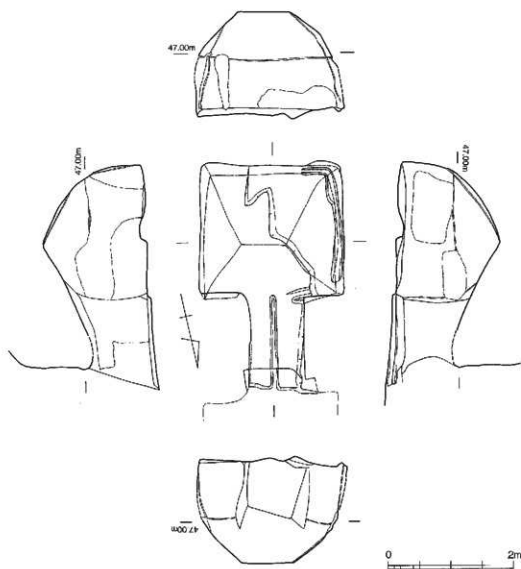
土器（第6図、図版25）

1は坏蓋、2は坏身である。墓道先端で重なって出土しており、また色調や法量からセット関係



第7図 北1号墓出土鉄器実測図（1/2）

にあると考えられる。1は口縁端部を丸く収め、体部にゆるい段を残す。両者とも内面に当具と思われる痕跡が若干残る。3・4は返りのある坏身である。底部の調整は、3は回転ヘラケズリを施すが、4はヘラキリのままである。5は小型の壺で、1・2とともに墓道先端部で出土した。体部にはカキメを施す。6は高坏の坏底部から脚部片である。長方形の透孔を縦2段に穿っているが、部分的に粘土を残す雑な穿孔である。7・8は坏身の口縁部片である。返りの長さは1.5cm前後と2～4より若干長い。9は上師器の口縁部片である。おそらく壺と思われるが、破片が小さく詳細不明である。10は復元口径43.2cmを測る大型の甕である。頸部外面に1単位4～5本程度の波状文を施す。波状文は3条の沈線によって、2段に削付されている。11は甕の肩部片である。外面に格子タタキ、内面に同心円当具痕を施す。12～14は墓道中1-3号墓前で出土した。12は口縁端部に凹みを残し、体部にも稜線を残す。13は坏身で、12より時期が新しく、返りも7mmと短くなり、蓋として逆転する時期のものである。14は甕の胴～底部片で、復元胴部最大径は34.0cmを測る。外面格子タタキ、内面同心円当具で調整後、底部付近にはカキメを施す。



第8図 北1-1号墓玄室実測図 (1/60)

鉄器（第7図、図版35）

1は鉄鎌で、1-1号墓玄室より出土。茎部のみで木質が残存する。2・3は馬具で1号墓道から出土したが、おそらくは1-1号墓に伴う副葬品である。2は2環の兵庫鎖に鉸具を連結させている。兵庫鎖は棒状の鉄環を二つ折りにして組み合わせている。鉸具側の兵庫鎖（上部）は最大長11.5cmで、もう1環（下部）は最大長10.6cmを測る。下部側の兵庫鎖先端には鉄片が付着している。鉸具は厚さ5mmの鉄棒で略楕円形に作られており、長辺中央付近を押し曲げているが、左右非対称となり形状は不整形である。3は2と同様の方法で製作され、対になるものと考えられる。兵庫鎖2環を残すが、上側兵庫鎖（最大長10.8cm）の先端には1条の環の一部が組み合っていることから、ここで鉸具と連結すると考えられる。また、下側兵庫鎖（最大長11.6cm）の先端にも鉄片が連結している。

(2) 北1-1号墓（第8図、図版1）

北1-1号墓は、同墓群の主墓室である。当初より開口していたため副葬品の出土はなく、玄室からは埋土より鉄鎌片1点出土したのみである。主軸は、北1-1号墓道と同じにする。羨門部には土柱を削り出すとともに、飾り縁があったと思われるが、飾り縁上部は判別困難だった。長さ約1.5m、幅0.85mの羨道に、幅2.3m、奥行2.22m（最大）のやや横長の略方形で、四隅がやや丸みを帯びる玄室がつく。羨道中央には、幅0.1m、長さ1.48mの溝が主軸に沿って取り付けられており、玄室内部にも西側壁に沿って幅0.12～0.16mほどの溝があるが、部分的で途切れている。玄室側壁には床面から0.75～0.85mの高さに軒先線が四壁を一周し、玄門部で途切れる。玄門部の幅は1.04～1.1mである。玄室側壁は軒先線付近までゆるやかに内傾しながら直立し、軒先線より大きく内傾して天井をつくる。天井には屋根の痕跡が確認された。玄室の最大高は1.65mを測る。

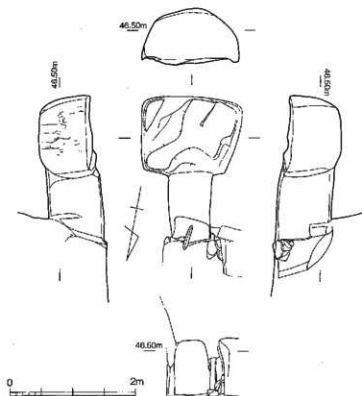
なお、玄室内部には乱れているものの敷石の痕跡があり、当初は敷石があった可能性がある。また、玄室壁面には線刻とおぼしきものがあつたが、落書きが著しく、判別困難であつた。

(3) 北1-2号墓（第4図、図版1）

北1号墓道西側側壁に築造された小横穴である。平面プランは巾着状を呈し、最大幅・最大長（奥行き）幅とも1.03m、高さ45cmを測る。遺物の出土はない。

(4) 北1-3号墓（第9図、図版2）

北1-1号墓東側に築造された墓室である。羨門部は飾り縁状で閉塞石の根石を若干残すが、当初より開口していたため、玄室内部から副葬品の出土はなかった。幅0.5cm前後、高さ0.88cmの入口に幅0.66cm、長さ1.0mの羨道がつき、幅1.6m、奥行1.24mのやや横長で四隅が丸みを帯びた玄室につながる。玄室主軸は、N-12°-Wである。羨道床面から玄室床面は0.2mほど高く、玄室床面

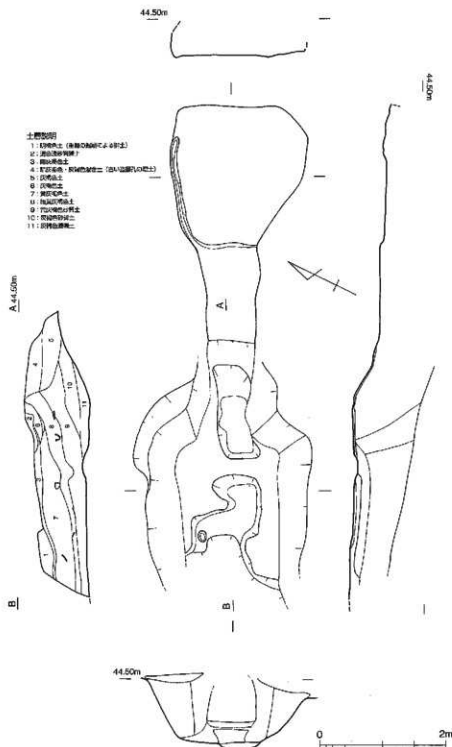


第9図 北1-3号墓玄室実測図 (1/60)

周囲には溝を巡らしているが、現状では崩落のため部分的に途切れている。側壁と天井には軒先線・屋根等の線がなく、やや内傾気味に直立する側壁からドーム状の天井を呈している。玄室内高さは最大で0.85mを測る。

なお、玄室内部には乱れているものの敷石の痕跡があり、当初は敷石があった可能性がある。

2 西A号墓群（第10図）



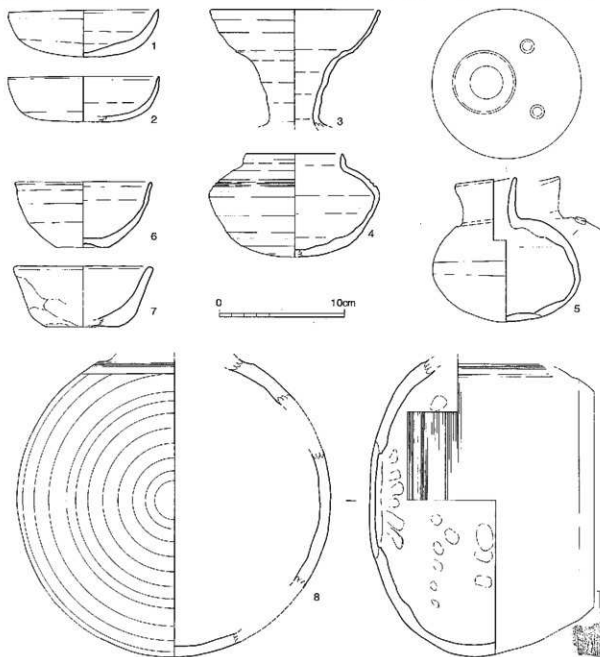
第10図 西A-1号墓実測図（1/60）

(1) 墓道 (第10図、図版2)

西側斜面で最も北側で検出された横穴墓である。墓道先端部は、調査以前にすでに掘削されていたので全長は不明であるが、前庭部を含めた現存長は約4mで、最大幅は2.8mある。この横穴墓は墓道の共有はなく、単独で構築されている。

出土遺物 (第11図、図版25)

1・2は坏身である。調整は不明瞭で器形、胎土とも土師器でもよいが、焼成は堅緻である。1は1~7mm前後の砂粒を多く含むが、2は若干含むものの1に比べてかなり少ない。1・2とも外面にススが付着する。3は甕の口縁部~頸部である。口縁部と頸部の境に沈線を1条巡らし、内外面には自然釉が一部付着している。4は短頸壺で、1cmの頸部が直立する。肩部には2条の沈線を巡らしている。5は平瓶だが、ミニチュアともいえる小型品である。肩部には幅1cmの小門板が2ヶ所

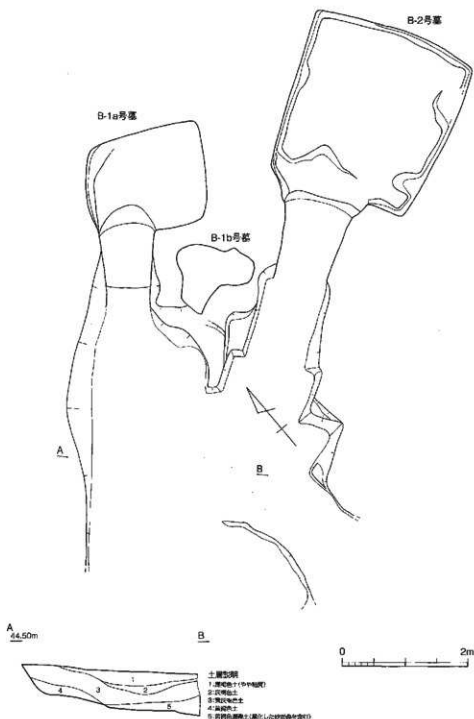


第11図 西A-1号墓道出土土器実測図 (1/3)

貼付されている。6・7は土師器の坏身である。両者とも復元口径約10.6cmに對し、復元器高5cm前後とやや深い。8は提瓶の体部片である。外面腹部には同心円の丁寧なカキメを施し、内面には指頭圧痕がいくつか残る。

(2) 西A-1号墓 (第10図、図版3)

玄室は最大幅2.15m、奥行2.2m、羨道長3.1mを測る。天井は、玄室・羨道とも調査時にはすでに崩落しており、調査中にも一部崩落するなど危険な状況であった。



第12図 西B号墓群実測図 (1/60)

閉塞装置は残っておらず、すでに盗掘されていると思われる。玄室・羨道からの遺物の出土はなかった。調査時には、床面には敷石は見られなかったが、埋土中に多量の円礫が存在し、石敷きであった可能性もある。袖部は明瞭でないが、羨道は北側に偏っており、片袖といつてよいだろう。玄室平面形は偏ったフラスコ型である。玄室北西側に一部側溝が見られるが、その他の部分では確認できなかった。前庭部・羨道間、羨道・玄室間に段差を有し、前庭部・羨道間の段差は約44cmと大きい。前庭部と羨道の間に若干の高まりがある。

3 西B号墓群(第12図)

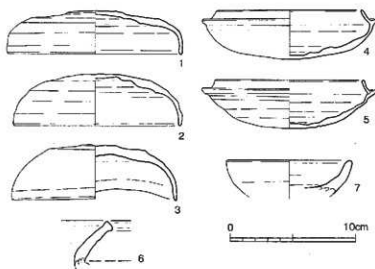
(1) 墓道～前庭部

西B-1a号、B-2号の2基の横穴墓とB-1b号小横穴が墓道を共有している。B-1a号の墓道底面が若干高い。前庭部については、B-1a号とB-2号との間は地山岩盤を掘り残した出っ張りで仕切れられ、区別されている。B-1a号とB-2号との間の出っ張り部分にB-1b号が掘削されている。

出土遺物(第13図、図版25・26)

1～7は西B-1号墓とB-2号墓が共有する前庭部からの出土である。1～3は坏蓋で、1・3は天井部をヘラキリ後弱いナデを施す。3は焼成時にひずみを帯び、自然釉が付着している。4・5は返りのある坏身で、1.3cm前後の返りが内傾して立ち上がる。5は大部分に自然釉が付着している。6は壺の口縁部片であり、回転ナデで調整されている。7は土師器の坏だが、小型なので皿の可能性もある。

(2) 西B-1a号墓(第14図、図版4)

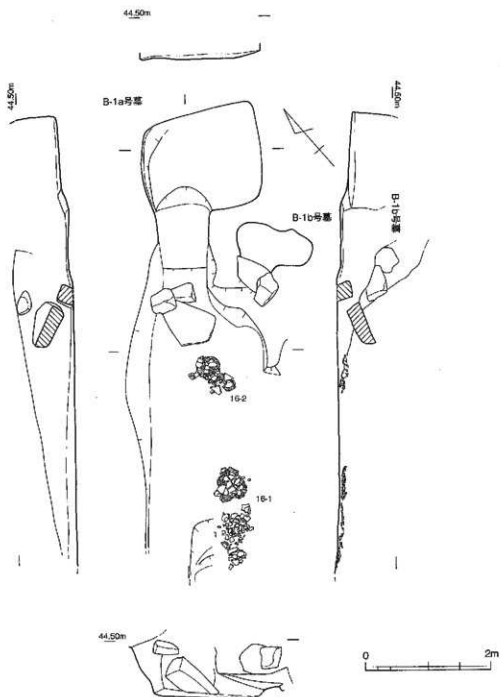


第13図 西B号墓前庭部出土土器実測図(1/3)

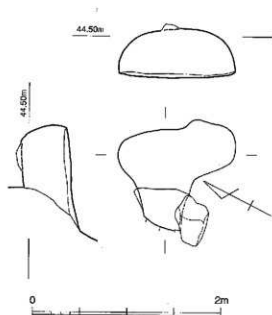
玄室最大幅1.92 m、奥行1.54 m、羨道長1.2 mを測る。玄室・羨道とも天井部はすでに崩落していた。玄室平面形は横長の長方形で、短辺がやや外湾している。羨道は片袖で、奥壁に向かって左に付く。前庭部・羨道間、羨道・玄室間に段差を有する。閉塞は厚さ22 cmほどの板石と塊石を組み合わせで行っているが、板石はすでに動かされており、内部は盗掘を受けている。前庭部・墓道の床面から若干浮いた状態で2個体の甕が出土している。

(3) 西B-1b号墓(第15図、図版4・5)

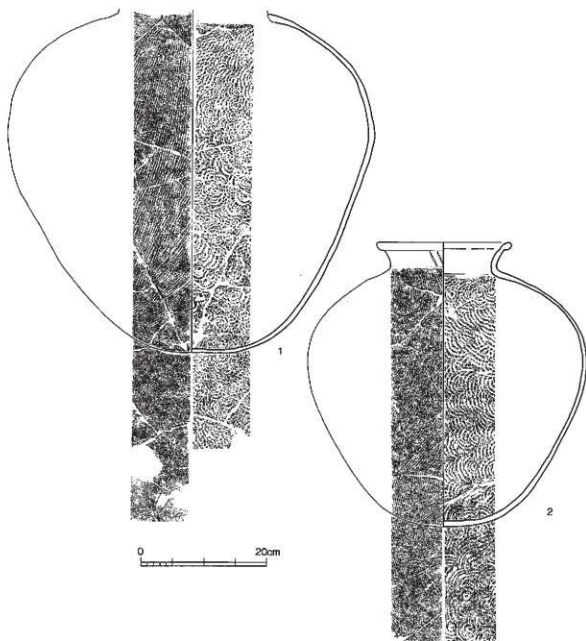
B-1a号墓道の壁面に掘削された小横穴墓である。玄室幅1.22 m、奥行0.52 m、羨道長0.48 mを測る。羨道入口端部から、B-1a号墓の前庭部床面まで、0.5 mの高低差がある。閉塞は塊石積で行われていたと思われるが、残存する閉塞石は1個のみである。羨道・玄室からの遺物の出土はない。



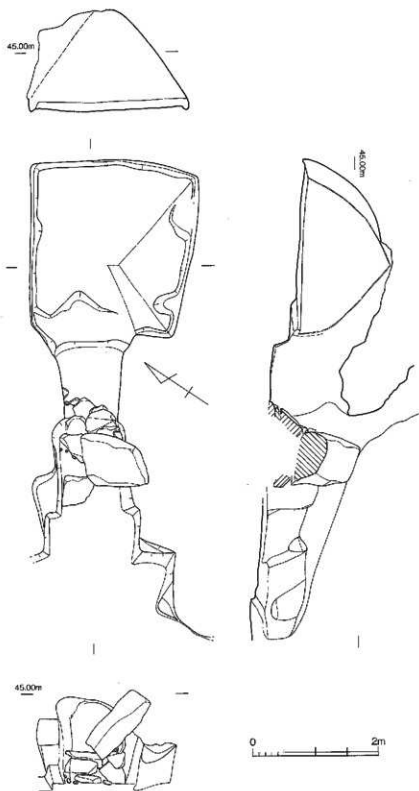
第14图 西B-1a号墓实测图 (1/60)



第15图 西B-1b号墓实测图 (1/40)



第16图 西B-1号墓出土土器实测图 (1/6)



第 17 图 西 B - 2 号墓实测图 (1/60)

出土遺物 (第 16 図、図版 3・4・26)

西 B-1 号墓道からは、大甕 2 個体が出土している。1 は外面を平行タタキ、内面に同心円当具痕を残し、外面底部にはカキメを施す。焼成は土師器で調整が須恵器であることから、いわゆる赤焼須恵器の類である。現存高で 54.1cm を測る。接合した結果、頸部から口縁部にかけての破片が全く見つからなかった。頸部と胴部との接合部には貼付痕が認められるが、貼付痕も焼成されているので、焼成以前より頸部以上を失っていた可能性がある。なお、1 については、西 C-1 号墓道から出土した破片とも接合した。2 は通常の須恵器甕で、器高 45.4cm を測る。調整は 1 とほぼ同じだが、外面タタキは縦格子状である。頸部はやや外湾して立ち上がり、口縁部は丸く収める。頸部外面には、縦斜線 2 本のヘラ記号がある。

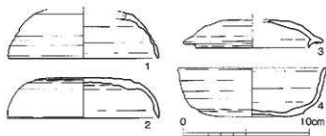
(4) 西 B-2 号墓 (第 17 図、図版 5)

玄室最大幅 (奥壁側) 2.66 m、奥行 2.8 m、羨道長 1.44 m、天井高 1.46 m を測る。玄室平面形は、奥壁側が広い台形状を呈する。天井形態は寄棟形になると思われるが、北西側の天井・壁面は大部分が崩落していた。玄室床面の周囲に側溝が廻る。羨道・玄室間に段差を有し、また、玄室の入口部分と奥側との間にも段差がある。閉塞施設は大部分が残っており、塊石積みの上に最大 30 cm 程度の厚みの縦長の板石を載せて閉塞していた状況がわかるが、板石は南側に移動されており、内部は盗掘を受けていた。

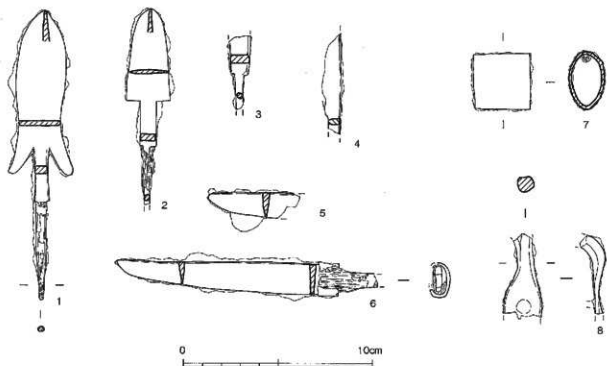
出土遺物

土器 (第 18 図、図版 26)

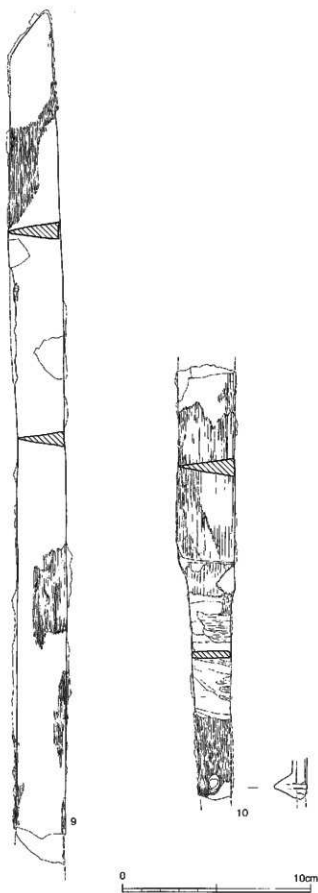
1・2 は坏壺としたが、1 については坏身の可能性もある。両者とも外湾して口縁部が立ち上がる。3 は返りのある甕である。



第 18 図 西 B-2 号墓玄室出土土器実測図 (1/3)



第 19 図 西 B-2 号墓玄室出土鉄器実測図① (1/2)



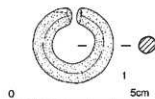
第20図 西B-2号墓玄室出土鉄器実測図② (1/2)

天井部は回転ヘラケズリを施すが、中央部が欠損しているため、つまみが付くかは不明である。4は2に比べて器高が深いことから坏身としたが、坏蓋の可能性もある。天井部はヘラキリ後に弱いナデを施す。

鉄器 (第19・20図、図版35・36)

1～4は鉄鏃である。1は三角類で腸袂を有し、茎部には木質が残る。2も三角類で、関・筈被ともにほぼ直角である。茎部には木質が残る。3・4は鉄鏃としたが、破片のため全容が不明である。3はやや鈍角の関部を残し、茎部に木質が残る。4は関部が片側のみで鈍角である。5・6は刀子である。5は刃先のみである。6は茎部先端が欠損するのみで、鐔口金具が残るため関部の形状は不明である。茎部と鐔口金具に木質が残る。7は刀子の鐔口金具。一辺3.0cmの正方形で、断面は倒卵形である。内面には木質が付着している。8は馬具で、鍔金具片である。内面には木質が付着している。

9・10は鉄刀である。同一個体の可能性もあるが、接合しなかったもので、別個に図示した。9は刀身部で、現存長45.0cm、幅2.5cmを測る。刃先付近はやや内湾気味である。所々に鞘の一部と思われる木質が付着していた。10は鉄刀の関から柄部である。刀身部は木質が多く残っており、柄部は樹皮が巻かれた痕跡もある。柄部先端には径5～7mmほどの目釘穴が



第21図 西B-2号墓出土遺物実測図(2/3)

穿たれており、径2mmの目釘の一部が直角に刺さっていた。

耳環 (第21図、図版36)

1は耳環である。銅地に金張りと考えられるが、残存状態が悪く詳細不明である。

4 西C号墓群 (第22図)

(1) 墓道～前庭部

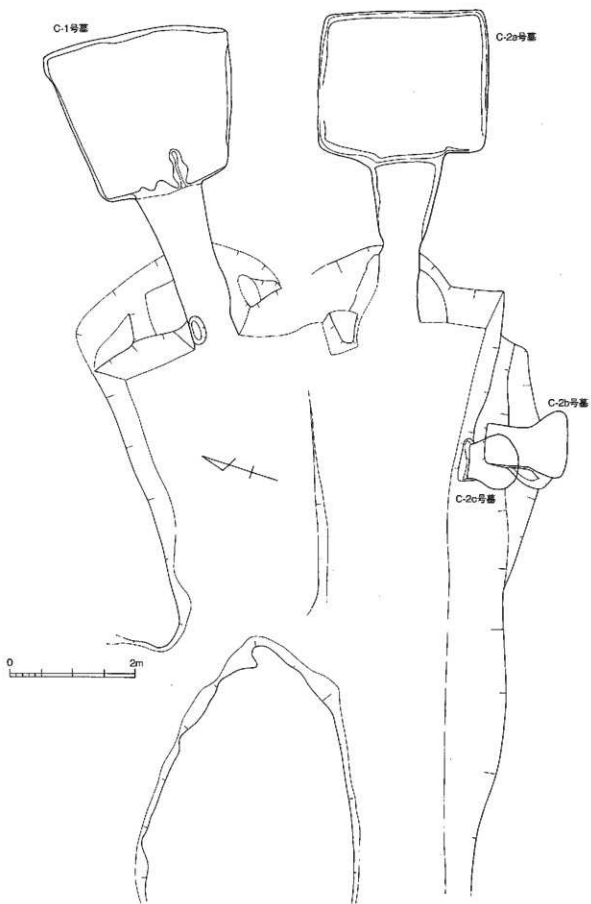
西C-1号及びC-2a号墓が前庭部を共有しており、C-2a号墓の墓道壁面にC-2b号・C-2c号小横穴が掘削されている。C-1号とC-2号の間の前庭部正面壁には仕切り状の部分や段差はなく、平面的につながっている。C-1号墓の墓道の前方には低い島状の高まりがあり、墓道先端部はC-2号墓道と合流するが、B号墓道とも狭い通路状の部分でつながっている。墓道底面のレベルを比較すると、C-1号の方が若干高い。

出土遺物 (第23・24図、図版26～28)

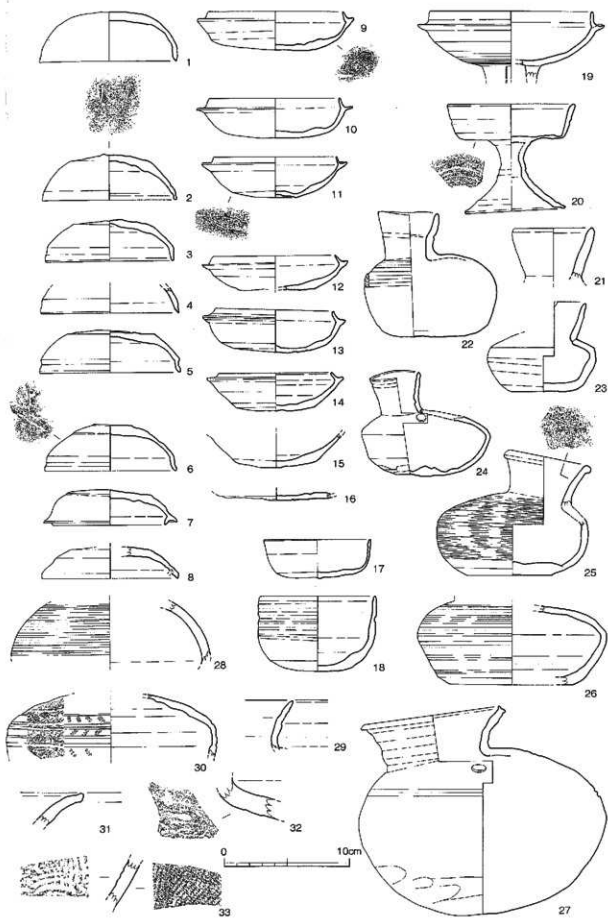
1～8は坏壺で、1～6が返りのないもの、7・8は返りのあるものである。1は1cm、2は0.5cmの口縁端部を直立させる。両者とも天井部はヘラキリのままだが、2はその後粗いナデを施し、2本の斜線でヘラ記号を入れる。3・5も同様に外面に弱い凹みをつけ、3は口縁部がやや直立、5は外湾気味に立ち上がる。6は口縁部に幅の広い沈線をつけ、直立して立ち上がる。天井部外面はヘラキリ後にナデを施し、×のヘラ記号を入れる。7・8は坏身の可能性もあるが、受部の内傾が進んでいることから坏蓋として図示した。7の天井部はヘラキリ後に粗いナデを施している。9～17は坏身であり、9～14は返りがあるものである。1cm未満の短い返りは、直立するかやや内傾気味である。13は外面底部まで回転ヘラケズリだが、9～12・14はヘラキリ後に雑なナデを施す程度である。9・11は、外面に2本の斜線でヘラ記号を入れる。15・16は底部片である。16は外面をヘラキリするのみである。17は返りのない坏身で、体部から口縁部がやや外傾しながら直立する。底部はヘラキリ後に雑なナデを施す。18は碗で、口縁に対して器高が深い。底部は回転ヘラキリ後に丁寧なナデで、体部には沈線1条とカキメを施す。19・20は高坏である。19は返りがある有蓋高坏の坏部で、脚部は失われていたが透孔の一部から四方向に穿たれていたと考えられる。20の坏部は返りを持たず、口縁部がやや外傾気味に立ち上がる。坏部外面にはヘラ記号と思われる斜線が見られるが、欠損しており全容は不明である。脚端部はゆるやかな凹みをもって面取りされている。

21～29は平瓶である。21は口縁部片のみで、提瓶の可能性もある。一部自然釉が付着している。22～25は小型品である。22は口縁部外面に巡らした1条沈線の内面に、接合痕を残す。胴部上半部にはカキメを施す。部分的に自然釉が付着する。23の底部はヘラキリ後にナデを施し、胴部と頸部の境に接合痕がみられる。24は底部に手持ちヘラケズリを施す。径0.8cmのボタン状の耳が1対あったと思われるが、欠損しており1つだけ現存する。胴部天井には幅4.0cmの円盤充填痕がみられる。25は底部をナデ、底部付近の胴部に1.5cmほど回転ヘラケズリ、胴部にカキメを施す。頸部と胴部の境には接合痕がみられる。頸部内面には3本の線によるヘラ記号がある。26は中型品の胴部片である。外面にはカキメを施す。27は通常サイズのもので、底部には手持ちヘラケズリを施す。口縁端部を内面にややつまみあげる。肩部には径1.1cmのボタン状の耳が2ヶ所につく。28は胴部片で、外面に粗いカキメを施す。29は口縁部片である。

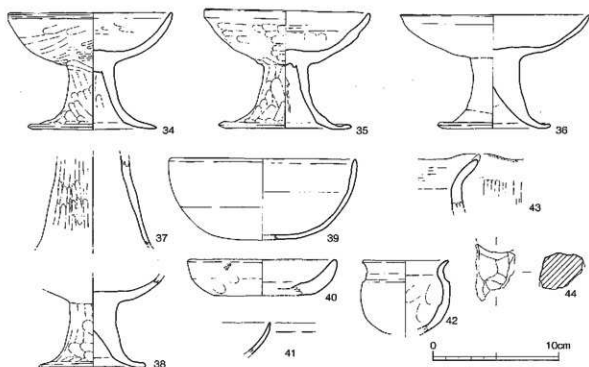
30は胴部片のみで全容不明だが、器形より大型の短頸壺とした。沈線で3段に区画された刺突文が、向きを変えて施されている。31は土師器だが、口縁部のみで器形は不明である。外面に指頭圧



第22图 西C号墓群实测图 (1/60)



第23图 西C号墓道~前庭部出土土器実測图① (1/3)



第24図 西C号墓道～前庭部出土土器実測図② (1/3)

を残す。32・33は壺と思われる体部片である。両者とも内面に円形当具痕が見られ、外面は32はカキメ、33が格子状タタキを施している。

34～44は全て土師器で、34～38は高坏である。34～36の器形はほぼ同じで、内湾気味に口縁が立ち上がる坏部に、裾部が開く脚部がつく。34の坏部はミガキを施す。35はナデ調整で、脚部内面には指頭圧痕が見られる。37は脚部片である。外面の縦方向の細かいミガキは暗文状を呈している。38は坏底部から脚部が残る破片で、外面はヘラケズリを施す。39は器高が深い碗としたが、調整は不明瞭である。40は坏としたが、破片のため全容不明である。厚さ1.0cmで、内外面にケズリの痕跡が見られる。41は坏口縁部片である。42は丸底壺で、ミニチュアのような小型品である。外面にはわずかに指頭圧痕がみられる。43は壺の口縁部片で、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。口縁端部には小さい刻目がみられる。44は、先端を欠損している甌の把手片である。

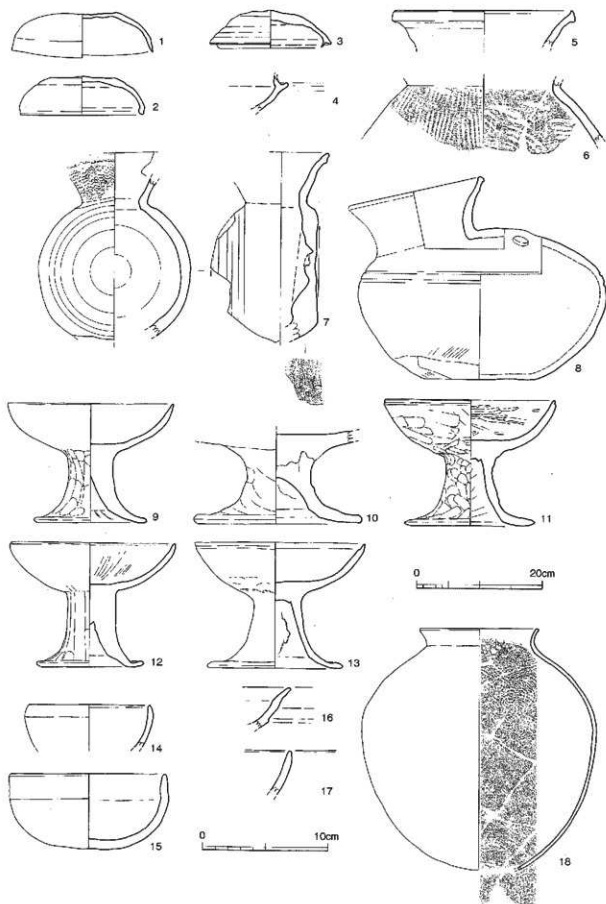
2) 西C-1号墓

墓道 (第25図、図版6)

墓道は、先述したようにC-2号墓道と合流すると考えられるが、B号墓道とも幅約1mの通路状部分でつながっている。墓道埋土縦断面を見ると、羨門部直前部分で最下層を切るラインがあり、葬痕跡の可能性も考えられる。

玄室 (第25図、図版6・7)

玄室最大幅(奥壁側)2.96m、奥行2.64m、羨道長2.5m、天井高1.62mを測る。玄室平面形は奥壁側に開く台形状を呈する。壁面は垂直に近く立ち上がり、軒先線の表現が見られる。天井形態は寄棟形である。床面の周囲には側溝が廻る。羨道は玄室のほぼ中央に付く両袖型である。前庭部・墓道間、羨道・玄室間に段差を有する。羨門天井石(庇石)を有する。前庭部の両側に土柱状に岩を掘り残しており、その上に羨門天井石を架構している。



第26図 西C-1号墓出土土器実測図 (18は1/6、その他は1/3)

出土遺物 (第26図、図版28・29)

1のみ西C-1号墓玄室内出土で、その他は全て同墓道からの出土である。1・2は坏蓋である。1の天井部は回転ヘラケズリ後に不正ナデを施す。焼成時の焼けひずみ大きい。2は天井と体部焼にゆるい段をつけ、口縁端部をやや内湾させる。天井部はヘラキリ後にナデを施す。3・4は返りのある坏で、3は蓋だが、4は口縁部片のため一応身として図示した。3は0.5cm長の返りが内傾し、天井部はヘラキリ後やや丁寧なナデを施す。5・6は壺で、同一個体の可能性がある。5は口縁部片で、口縁端部をつまみ上げる。6は肩部で、外面に平行タタキ、内面に円形当具の痕跡がみられる。7は提瓶の小型品である。頸部に粗い波状文、腹部にカキメを施す。底部外面には十字のヘラ記号がある。腹部内面被蓋部には、幅5.7cmの円盤充填をしている。8は平瓶である。底部には一部タタキの痕跡を残す。肩部には径1cmの耳が2ヶ所にある。

9～13は土師器高坏である。9は土師器としては胎土精良、焼成良好で、裾部内面には一部須恵器のカキメもみられるが、器形や脚部と坏部の調整は土師器的である。10は、坏部底部中央に突起をつくり、ソケット状に脚部に差し込んで接合している。11の脚部はナデで調整し、坏部外面はミガキ、内面には雑な暗文を施している。12も9と同様の胎土・焼成・色調である。脚部外面は縦方向のケズリ、坏部内面には放射線状に暗文を施す。13はナデ調整で、坏下半部に指頭圧痕がみられる。脚部内面には粘上を刮りぬいた痕跡がある。14・15は土師器碗である。15は外面にケズリの痕跡がわずかに残り、底部外面には黒斑がある。16・17は坏の口縁部片としたが、16は外面にゆるい段を残し、外傾して立ち上がることから高坏の可能性もある。18は焼成及び色調は土師器だが、外面は調整が不明瞭にもかかわらず内面に同心円当具痕がみられる。須恵器の技法により製作された、いわゆる赤焼須恵器の類である。

(3) 西C-2a号墓

墓道 (第27図、図版7)

墓道は、調査区外のすでに掘削された部分まで延びていたと思われるので、全長は明らかでないが、現存長は約10mである。墓道埋土縦断面を見ると、現在の盗掘孔以前の盗掘痕跡と思われるラインが見られるが、追葬痕跡は明らかにできなかった。

出土遺物 (第28図、図版29)

8のみ西C-2b号墓出土で、その他は全て西C-2号墓道出土である。1・2は法量から同時期の坏蓋・坏身のセットである。1の天井部外面はヘラキリ後ナデを施しているが、2の外面には一部回転ヘラケズリがみられる。3・4も法量から同時期のセットと考えられるが、蓋と身が逆転している可能性もある。3の天井部と4の底部外面は、ともにヘラキリ後にナデを施している。5・6は返りのある坏蓋である。5の天井部外面は回転ヘラキリ後にナデを施す。受部には一部打ち欠きがみられる。6は天井部に高さ1.0cm、径1.7cmのつまみが付く。7は横瓶と思われる胴部片である。内面に円形当具、外面にタタキの痕を残す。外面には一部自然釉と径11.8cmの土器付着痕がみられる。8は西C-2b号墓の小横穴内埋土から出土した土器片である。破片のため全容不明だが、内面には回転ナデの痕跡があり、赤焼須恵器の可能性もある。

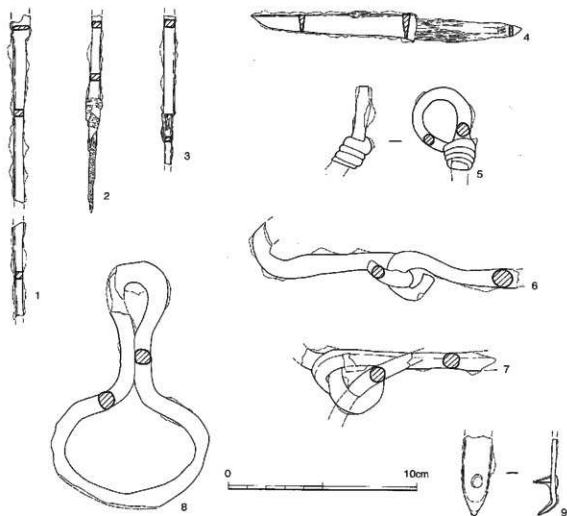
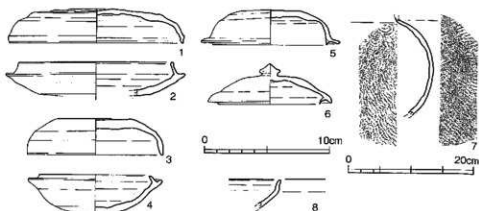
玄室 (第27図、図版7・8)

玄室幅2.64m、奥行2.3m、羨道長2.54m、天井高1.63mを測る。玄室平面形は横長の長方形を呈す。玄室床面には敷石を施している。盗掘による攪乱土中に円礫が多数含まれており、敷石の一部は原位を留めていないものと思われ、本来は、床面全面に密に施されていたと考えられる。玄室床面

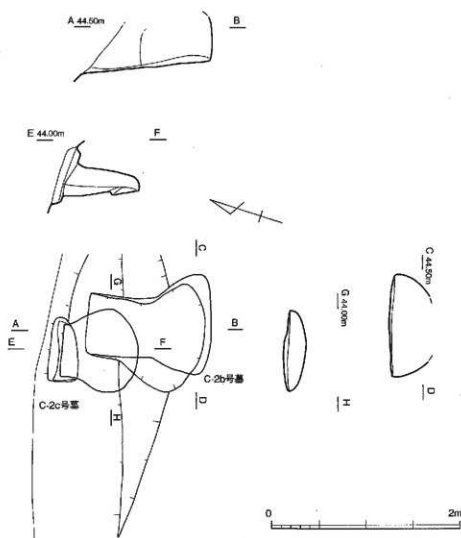
の周囲には側溝が廻る。天井形態は尖塔アーチ型に近いが、それほど極端に高くない。天井部の羨道側は、大部分が崩落していた。羨道・玄室間に段差を有するが、前庭部・羨道

間には段差はない。 第28図 西C-2号墓道及びC-2b号墓出土土器実測図（7は1/6、その他は1/3）
閉塞は、縦84cm、

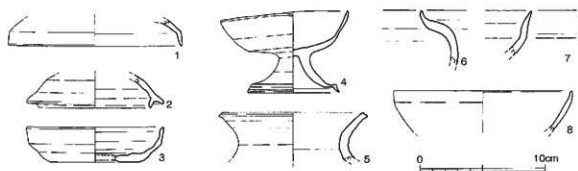
横幅60cm、厚さ18cm前後の板石で行われていた。板石は盗掘により本来の位置から動いており、羨門部に空間が開いていた。羨門部床面には大きめの塊石が1個残っており、塊石積みの上に板石を載せていた可能性もある。



第29図 西C-2a号墓玄室出土鉄器実測図（1/2）



第30图 西C-2b·2c号墓实测图 (1/40)



第31图 西B·C号墓群出土土器实测图 (1/3)

出土遺物

鉄器 (第 29 図、図版 36・37)

西 C-2a 号墓玄室内からは鉄器が出土した。1～3 は鉄鏃であり、2・3 は玄室側溝より出土した。の関部は鈍角であり、2・3 の腕被部は残存するものの不明瞭である。2 は茎部に木質と樹皮巻が残り、3 も茎部の一部に木質が残存する。4 はほぼ完形の刀子で、玄室側溝より出土した。全長 4.3cm で、刀身長 8.8cm、茎部長 5.5cm を測る。刀身部の一部と茎部に木質が残る。5～9 は馬具で、～7 は引手金具である。5 は引手金具の先端部である。径 0.6～0.8cm の棒状のもので環をつくり、一端を環の根元に 3 回半巻きつけている。6・7 は S 字状の棒状を連結させる。7 は轡の一部と思われる鉄棒が連結している。8 はほぼ完形の轡である。径 0.8cm 前後の鉄環を折り曲げて製作する。9 は中央に長さ 1.4cm の紙が垂直に刺さっており、内面には木質を残している。

4) 西 C-2b・2c 号墓 (第 30 図、図版 9)

西 C-2b 号墓

C-2a 号墓の墓道側壁に掘削された小横穴墓で、墓道床面から 1.1 m 上に掘削されている。玄室幅 0.05 m、奥行 0.58 m、羨道長 0.7 m を測る。検出時すでに天井部の大部分は崩落していた。玄室平面形は偏楕円形を呈する。閉塞装置はなかった。墓室内からは土器片が 1 点出土した。

西 C-2c 号墓

C-2a 号墓の墓道側壁の C-2b 号墓の下に掘削された小横穴墓で、墓道床面から 0.38 m 上に掘削されている。玄室幅 0.86 m、天井高 0.28 m、羨道と玄室の区別は明瞭でなく、淡門～奥壁までが 0.8 m である。閉塞は塊石積で行われていた。墓室内からの遺物の出土はない。

5) 西 B・C 号墓道出土遺物 (第 31 図、図版 29)

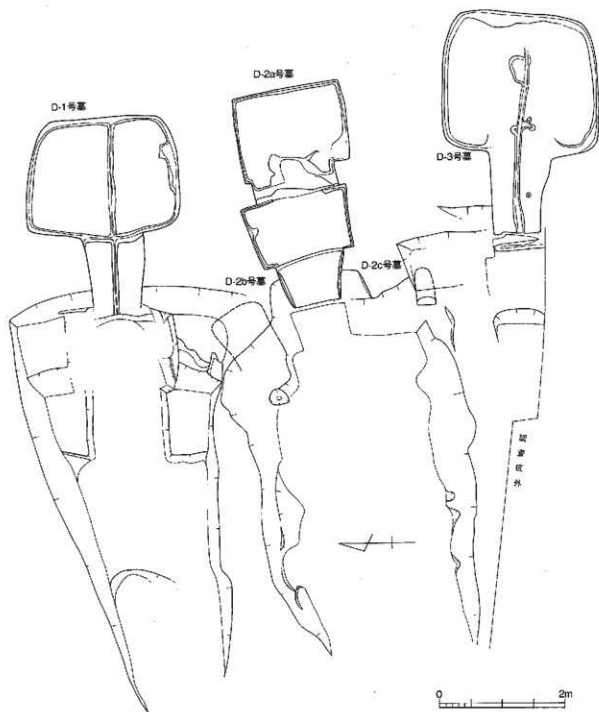
西 B・C 号墓検出中に、両墓道からまたがって土器が出土した。1～3 は坏類である。2 は返り長短く内傾が進んでいるので甕とした。3 は坏甕の可能性があるが、一応身として図示した。底部にヘラキリである。4 は高坏で、坏部外面底部に回転ヘラケズリを施す。5 は甕の口縁部片で、口縁部に不明瞭な凹みをつくる。肩部近くの内面に当具、外面にはタタキを残す。6 は短頸甕片で、面にカキメを施す。7 は高坏の坏部片で、外面には細かいカキメを施す。8 は土師器の碗片で、面に黒斑がある。

西 D 号墓群 (第 32 図)

この小群は、3 基の横穴墓と 2 基の小横穴によって構成されている。小群の南は調査区外に連なっており、群の南端部は未調査である。そのため、構成横穴墓・小横穴は上記したより増える可能はある。

C 号墓群と D 号墓群の前庭部底面は約 2m のレベル差があり、また、地山岩盤を掘り残した障壁部により、明瞭に区画されている。D-1 号～D-3 号墓間の前庭部正面壁は連続しているが、D-1 と D-2 号の間の墓道は低い障壁状部によって区画されている。D-3 号墓道は大部分が調査区外であるため一部しか明らかでないが、D-2 号墓道との間には明瞭な稜線があり、区別される。

D-2a 号横穴墓の前庭部正面壁北側下部に D-2b 号小横穴が、南側上部に D-2c 号小横穴が掘削されている。D-2c 号小横穴は D-3 号墓に伴う可能性も考えられる。

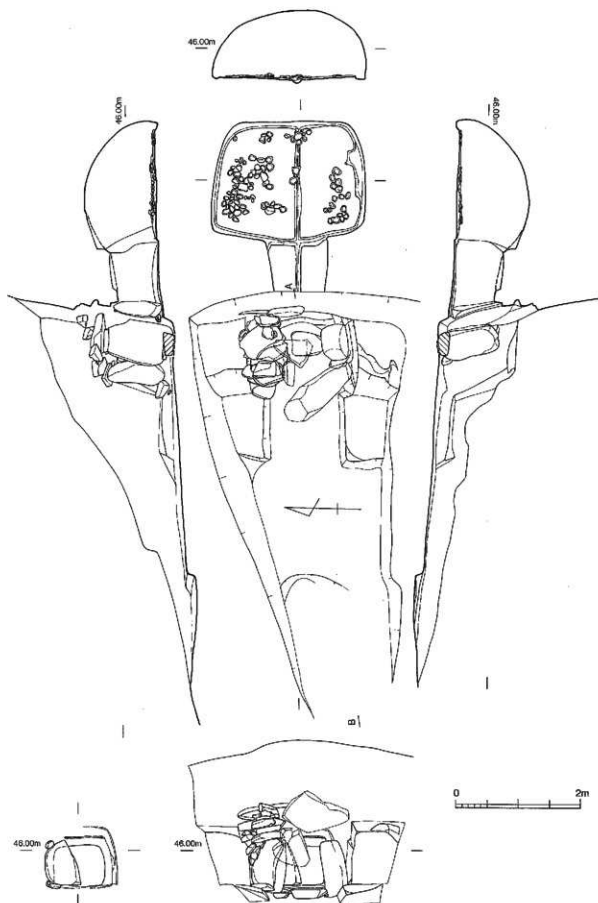


第32図 西D号墓群実測図 (1/60)

(1) 西D-1号墓

墓道 (第34図、図版9)

墓道は、あまり長大なものではなく、羨門から約5mで丘陵斜面へ出る。墓道埋土断面からは追葬痕跡等は確認できなかった。

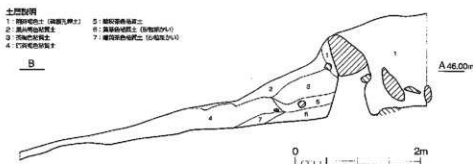


第33图 西D-1号墓实测图 (1/60)

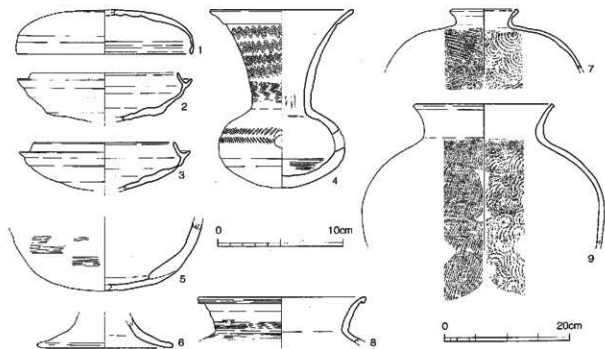
出土遺物(第35図、
図版29・30)

1は坏壺、2・3は
坏身である。1の天
井部外面はヘラキリ
後ナデを施し、2の
底部外面は回転ヘ
ラキリ未調整であ
る。2・3は1.1～
1.4cmの受部が外傾
して立ち上がる。4

は甕である。頸部から口縁部は外湾して立ち上がり、口縁部との境には段をつくる。頸部にはカキメの上にやや雄な波状文が4段、胴部には2段の刺突文が向きを変えて施される。胴部はやや扁平気味で、中央に斜め上から1孔穿たれている。5は灰白色で生焼の須恵器である。被蓋部があることから、平瓶と思われる、外面には部分的にカキメがみられる。6は土師器高坏としたが、ロクロによる回転の調整を行っている可能性もある。7は横瓶であり、口縁端部を内面にわずかにつまみ上げている。胴部外面は擬格子タタキ、内面の同心円当具にはヘソが残る。8は壺もしくは甕の口縁部から頸部である。口縁端部には粘土紐をつけ、外面はわずかに凹みを有する。頸部下半部までカキメを施す。9は甕で、外面は擬格子タタキ、内面にはヘソがある同心円当具残る。西D-1号墓道のほか、D-2・3号墓道から出土した破片とも接合した。



第34図 西D-1号墓道土層断面図 (1/60)



第35図 西D-1号墓道～前庭部出土土器実測図 (7～9は1/6、その他は1/3)

玄室（第33図、図版10・11）

玄室最大幅（前壁側）2.44 m、長1.92 m、羨道長1.24 m、天井高1.14 mを測る。玄室平面形は、前壁側がやや広い台形状を呈す。天井はドーム形である。玄室床面には、石敷きが施されているが、盗掘による擾乱により一部しか原位置を留めていない。掘乱土中には多量の円礫を含んでいたため、本来は玄室全面に密に敷石を施していたものと考えられる。玄室の周囲には幅溝があり、そのみではなく、玄室・羨道の主軸に小溝が掘られている。閉塞は板石で行われており、本来は2枚を横に並べて行われていたものと考えられる。前庭部・羨道間には段差があるが、羨道・玄室間の段差はごくわずかである。羨門部にはいわゆる飾縁が二重に施されており、羨門上には庇状の掘込みがある。

前庭部に石組みがある。盗掘により破壊されている部分が多いが、北側は比較的残りが良い。北側石組みの構造は、大きめの縦長の板石を2個横に並べ、その上に平たい塊石を積み上げている。南側は、下部の縦長の石1個しか残っていないが、本来は北側と同様の構造だったと推測される。また、前庭部の堆積土上に浮いた状態で長さ1.3 m、幅0.6 mほどの大型の石を検出しており、盗掘により動かされたものと考えられるが、本来は、石組みの上に架構されて天井をなしていた可能性が推測される。前庭部の両側には岩盤を掘り残して形成された土柱状の部分があり、石組みはその側面に接している。土柱状部分から12～15 cm程の高さの台状部分が岩盤を掘り残して形作られている。

(2) 西D-2a号墓

墓道（第36図、図版11）

墓道は、D-1号墓道とほぼ同規模で、全長約5 mで丘陵斜面へ出る。墓道埋土断面を見ると、最下層を切るラインが見られ、追葬痕跡の可能性も考えられる。

出土遺物

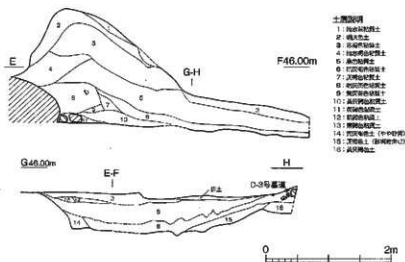
（第38図、図版30）

1は坏蓋である。口縁部は折り曲げて短く直立し、天井外面はヘラキリ後ナデを施し、内面には当具痕が残る。

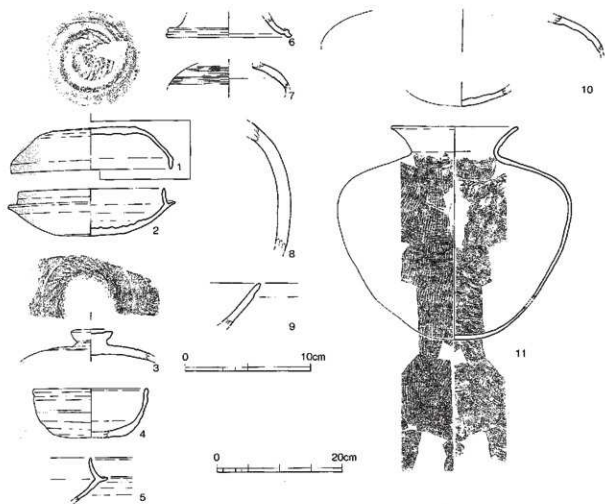
2は坏身である。長さ1.2 cmの受部がほぼ直立する。底部外面はヘラキリ後にナデを施す。3は粗い刺突文が巡るので、有蓋高坏の蓋部である。

4は坏身で、体部から口縁部が内湾気味に直立する。体部には沈線を1条施す。5は坏

身片で、長さ1.7 cmの受部が外傾して立ち上がる。6は高坏の裾部片である。端部を折り曲げてつくった面に沈線を1条施している。7は破片のため全容不明だが、小型平瓶の肩部と思われる。外面にはカキメを施す。8も破片のみで全容不明だが、一応平瓶の胴部片とした。外面はタキメ後にカキメを施す。9・10は土師器である。9は口縁部片で、外面に黒斑を残す。10は同一個体と思われる壺の肩部と底部である。底部は丸底で、外面には黒斑がある。11は甕で、口縁端部は丸く収め



第36図 西D-2号墓道土層断面図 (1/60)



第38図 西D-2号墓道～前庭部出土土器実測図（11は1/6、その他は1/3）

る。胸部外面は擬格子タタキの上にカキメ、内面は円形当具の上にナデを施す。西D-2a号墓道から出土したものを中心に、西D号墓道の各所から出土した破片と接合した。

玄室（第37・39図、図版11～13）

今回調査した横穴墓の中では唯一の複室横穴墓である。後室最大幅1.8m、奥行1.3m、天井高1.14m、前室最大幅1.73m、奥行0.98m、羨道長1.32mを測る。平面形態は、後室はややゆがんだ長方形、前室は奥壁側が広い台形状を呈する。天井形態はドーム型で、壁面は垂直に近く立ち上がり、天井との境に軒先線を廻らしている。天井部には、平行して凹線上の工具痕が見られ、意図的に施された装飾的なものと考えられる。前庭部・羨道間、羨道・前室間、前室・後室羨道間、後室羨道・後室間にそれぞれ段差がある。羨門部にはいわゆる飾縁があり、羨門天井石を有する。玄門部の天井と壁の境には岩盤を掘り出して突起を施している。前室・後室には側溝を廻らしているほか、羨道の両側にも側溝がある。



第39図 西D-2a号墓室
天井実測図（1/60）

出土遺物 (第40図)

1～4は西D-2a号墓玄室内の流入土中から出土した土器である。1は杯蓋のつまみとしたが、有蓋高坏の蓋部のものである可能性もある。2～3は返りのある杯蓋としたが、身の可能性もあるものの、破片のため全容不明である。4は体部から口縁部が直立することから、杯身とした。

(3) 西D-2b号墓 (第37・41図、図版13)

玄室最大幅0.87m、奥行1.06m、天井高0.6mで、羨道・玄室の境界は不明瞭であるが、平面形で見ると、開口部から0.4mほどからわずかに広がっている。前庭部は墓道床面に向かって傾斜してつながる。閉塞は塊石積であるが、検出時には基部しか残っておらず、墓室内は土砂で埋まっていた。遺物は出土していない。

(4) 西D-2c号墓 (第37・41図、図版14)

玄室最大幅0.3m、奥行0.6m、天井高1.5mで、羨道・玄室は一体化して筒状になっている。検出時には閉塞石はなく、内부는土砂で埋まっていた。遺物は出土していない。

(5) 西D-3号墓

墓道 (第43図、図版15)

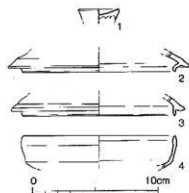
墓道・前庭部間、前庭部・羨道間に段差が見られ、特に墓道・前庭部間の段差は0.24mと大きい。羨道・玄室間には段差はない。墓道は、大部分が調査区外なので全容はわからないが、D-2号墓道とは明瞭な稜線で区画されている。

出土遺物 (第44図、図版30・31)

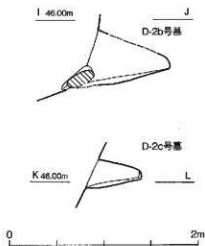
1・2は杯身である。2の底部外面には回転ヘラケリ後手持ちヘラケズリを施し、その際のヘラの痕が残る。3は有蓋高坏の蓋である。口縁端部に内傾して面をつくり、外面には2本の沈線の一つに刻目がみられる。4～7は高坏である。4は長脚の杯底部と脚部である。脚部外面にはカキメを施し、2段の長方形の透孔が3方向から穿たれている。5～7の杯部は体部から口縁部が内湾気味に外傾して立ち上がり、短い脚部がつく。5は脚端部を折り曲げて面をつくり、6は脚端部の面にヘラで鋭い沈線を入れる。8は平瓶である。底部と肩部付近に回転ヘラケズリを施す。西D-3号墓道のほか、D-2号墓道から出土した破片とも接合した。9・10は提瓶である。9は耳をもたない小型の提瓶である。10は径1.4cmのボタン状の耳が肩部に付いており、頸部から腹部にかけてカキメを施す。被蓋部径は6.0cm、厚さ0.8cmである。11は甕で、外面は縦格子タタキ、内面に円形当具痕を残す。12は土師器杯の大型品である。調整は不明だが、体部にゆるい段がある。

玄室 (第42図、図版14～16)

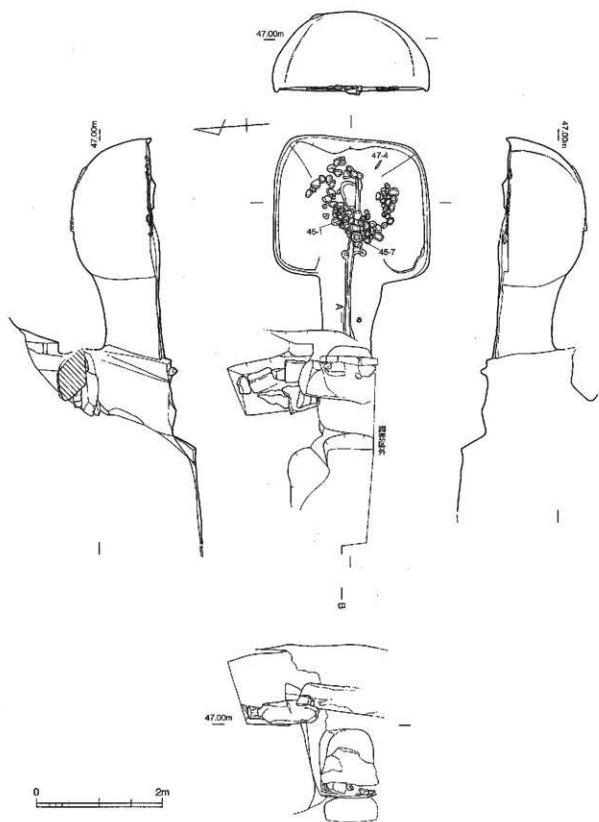
玄室最大幅2.48m、奥行2.16m、羨道長1.64m、天井高1.26mで、玄室平面形は前壁側が若干広い台形状を呈する。天井形態はドーム型であるが、四隅にかすかに稜線がある。玄室床面周囲には側溝があるほか、主軸上にも小溝が見られる。床面には敷石が施されているが、盗掘による攪乱



第40図 西D-2a号墓
玄室流入土出土土器実測図 (1/3)



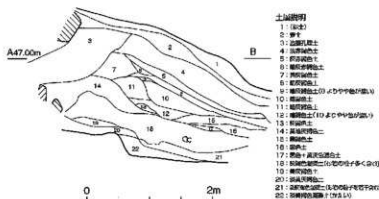
第41図 西D-2b・2c号墓
断面実測図 (1/40)



第 42 图 西 D - 3 号墓实测图 (1/60)

で一部しか残存していない。本来は全面に密に敷かれていたものと推測される。玄室床面の敷石上から土器が出土した。

前庭部正面壁の上面には岩盤を掘り残して棚状にした部分があり、塊石を組み合わせた上に羨門天井石を置いている。



第43図 西D-3号墓道土層断面図 (1/60)

出土遺物

土器 (第45図、図版32)

1は坏蓋で、体部に沈線を1条巡らす。天井部外面は回転ヘラキリ後雑ナデを施す。2～4は坏身である。2は口縁部が内湾しながら外傾して立ち上がる。底部外面はヘラキリ後にナデを施す。3・4は口縁端部がやや外湾している。両者とも、底部外面は回転ヘラキリ後にナデを施す。5は高坏の坏部である。体部に沈線を1条巡らし、外面下半部にはヘラケズリを施す。6は外面に浅い段があることから、甕の口縁部とした。頸部には細かい波状文がみられる。7は土師器坏で、体部にゆるい段をつくる。内面には粗いハケメが残る。

鉄器 (第47図、図版37)

西D号墓から出土した鉄器をまとめて報告する。1は西D-1号墓玄室出土の鉄鍔で、主頭類である。2は西D-2・3号墓道から出土した主頭類の鉄鍔で、鍔被部は鈍角である。3・4は西D-3号墓玄室出土である。3は鉄鍔で主頭類である。4は刀子で、基部先端は欠損していたが、木質が基部に残っている。

耳環・玉類 (第46図、図版37)

西D-3号墓玄室内から耳環と管玉が出土した。1は銅地金張りの耳環である。2は碧玉製の管玉で、径1.5～4.5cmの孔が穿たれている。

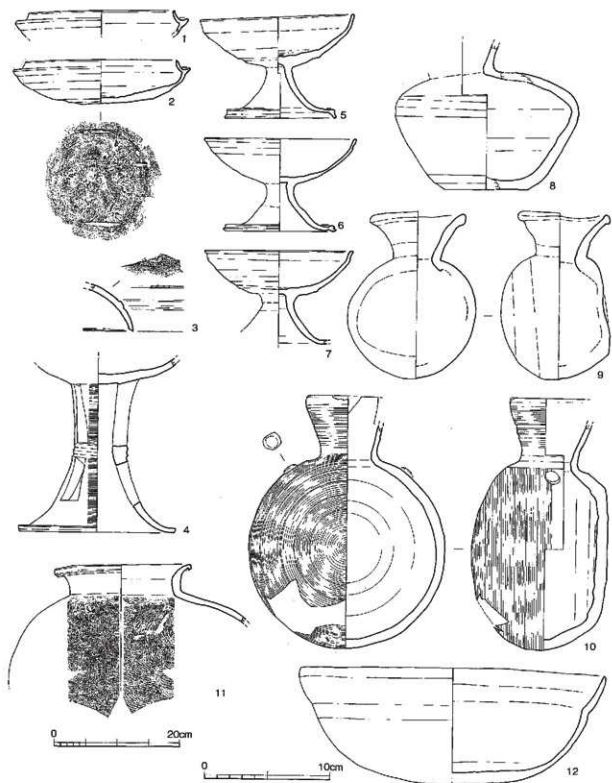
(6) 西D-2・3号墓出土土器 (第48図、図版32)

西D-2・3号墓前庭部から出土した土器である。1は坏蓋、2～4は坏身である。1の天井部外面、2の底部外面は、回転ヘラキリ後にナデを施す。2の受部は外傾して直立することで、若干湾曲している。3の受部には、セットとなる坏蓋の一部が付着している。5は平瓶の口縁部としたが、破片のため全容不明である。

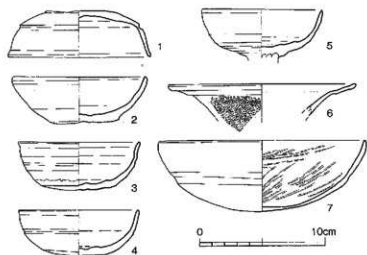
6～8は土師器である。6は坏で、全体を指ナデで調整している。7は壺、8は高坏脚部だが、摩滅著しく調整は不明である。

西地区表探土器 (第49図、図版32)

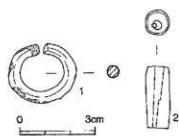
1・2は坏蓋で、2は返りがある。1の天井部外面は回転ヘラキリである。3・4は土師器坏である。3は底部から外傾して口縁部が立ち上がり、4はやや内湾気味に外傾して口縁部が立ち上がる。5は電気配線に用いられた罫子で、近現代のものである。



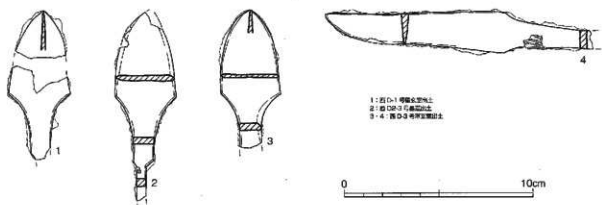
第44図 西D-3号墓道～前庭部出土土器実測図（11は1/6、その他は1/3）



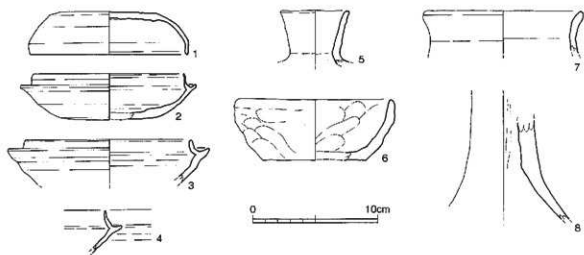
第45图 西D-3号墓玄室出土上器实测图 (1/3)



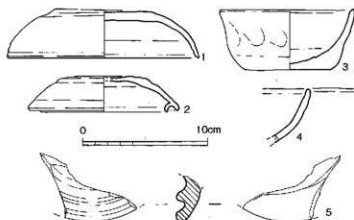
第46图 西D-3号墓玄室出土遗物实测图 (2/3)



第47图 西D号墓出土铁器实测图 (1/2)



第48图 西D-2·3号墓前庭部出土土器实测图 (1/3)



第49図 西地区表採遺物実測図 (1/3)

6 東A号墓群 (第51図)

今回、丘陵東側で調査したのはA号墓群のみである。A号墓群の中心であるA-1a号墓は、墓室部分が調査区の範囲外だったので、墓道の北半分を調査したのみである。墓道の壁面にb～eの4基の小横穴が掘削されていた。

また、小規模な墓道でつながれた小横穴群が存在し、これらをA-2号墓群とする。A-2号墓群ではa～dの4基の小横穴を検出した。A-2号墓群は盗掘による破壊が著しく、不明な点が多い。墓道は極めて幅が狭く、一部はオーバーハングしており、実際に使用されたのか疑わしい。A-2号墓群は、前庭部を中心にいわゆるヤツデ状の配置をとる。

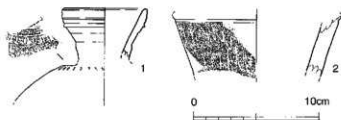
出土遺物 (第50図)

1・2は東A号墓道から出土した土器である。1は平瓶の口縁部とした。口縁部外面には沈線2条を巡らし、肩部には刻目を施す。2は色調・焼成とも土師器だが、かなり雑な波状文が外面に施されているので、いわゆる赤焼須恵器の甕とした。

(1) 東A-1号墓 (第52図、図版16)

東A-1a号墓 (第53図、図版16)

前記したように、墓室部分が調査区外であったため、墓道の約半分ほどを調査したのみである。墓道は残存長約14mと長大で、調査区端部まで続いていた。墓道堀土縦断面を見ると、前庭部前で埋土の大きなくぼみが見られ、かなり早い時点で盗掘されていたことが推測される。

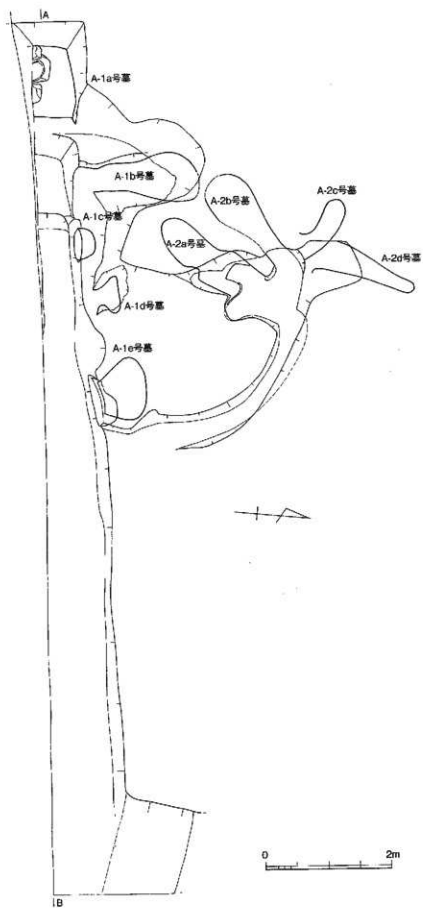


第50図 東A号墓道出土土器実測図 (1/3)

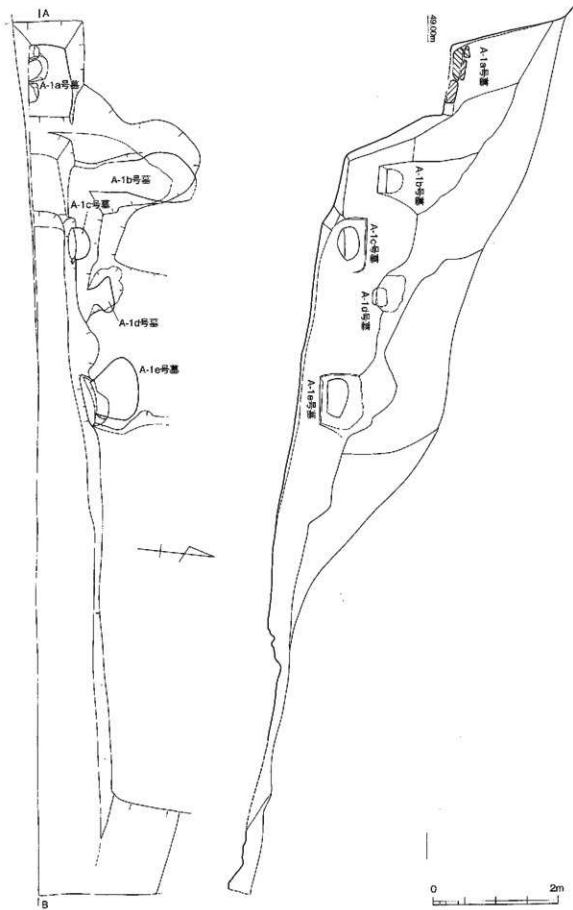
前庭部上面は平坦に加工されており、石組みが見られることから、羨門天井石が架構されているものと考えられる。

東A-1b号墓 (第54図、図版17)

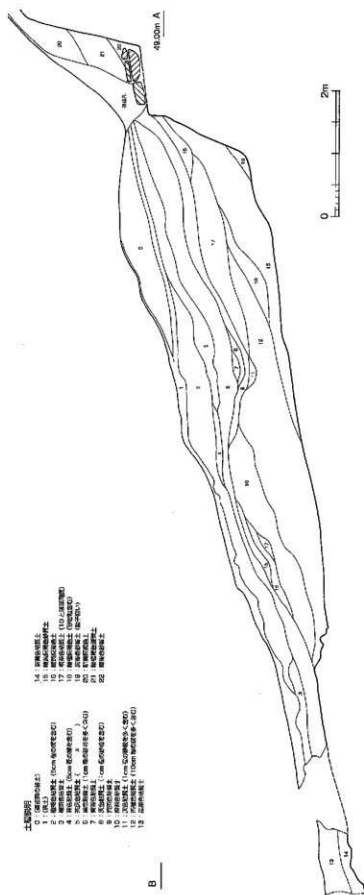
玄室・羨道の区別が明瞭でない小横穴で、最大幅0.78m、全長1.66mを測る。天井部は崩落している。A-1a号墓道床面から0.5mの高さに掘削されている。遺物の出土はない。



第51图 东A号墓群实测图 (1/60)



第52图 東A-1号墓实测图 (1/60)



第53図 東A-1号墓道土層断面図 (1/60)

東A-1c号墓 (第54図、図版17)

羨道のない小横穴で、最大幅0.5 m、全長0.33 m、全高0.3 mを測る。A-1a号墓道床面から0.2 mの高さに掘削されている。遺物の出土はない。

東A-1d号墓 (第54図、図版17)

玄室最大幅0.56 m、玄室・羨道の区別が明瞭でなく、全長0.6 mを測る。天井部は崩落していた。A-1a号墓道床面から0.96 mの高さに掘削されている。墓室内からの遺物の出土はない。

東A-1e号墓 (第54図、図版17)

玄室最大幅0.94 m、玄室・羨道の区別が明瞭でなく、全長0.72 mを測る。天井は前半部が大部分崩落しており、現存部で高さ0.26 mである。墓室内からの遺物の出土はない。

(2) 東A-2号墓 (第55図、図版18)

東A-2a号墓

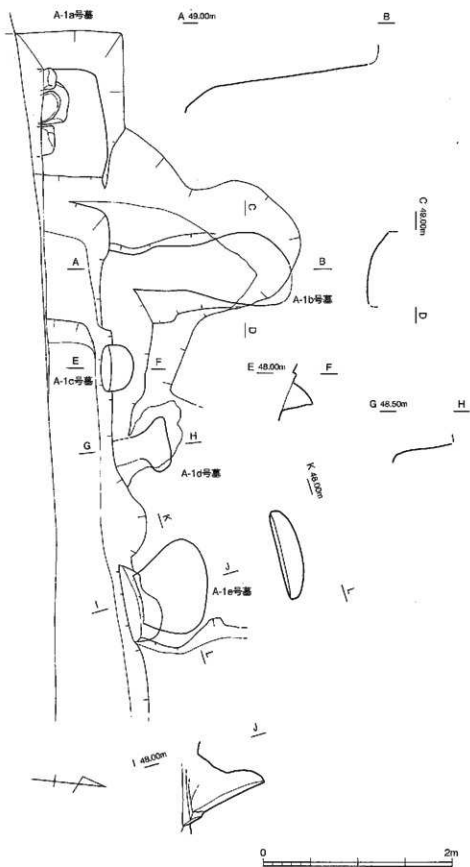
玄室最大幅0.56 m、羨道～天井部が盗掘により破壊されており、全長は不明。遺物の出土はない。

東A-2b号墓

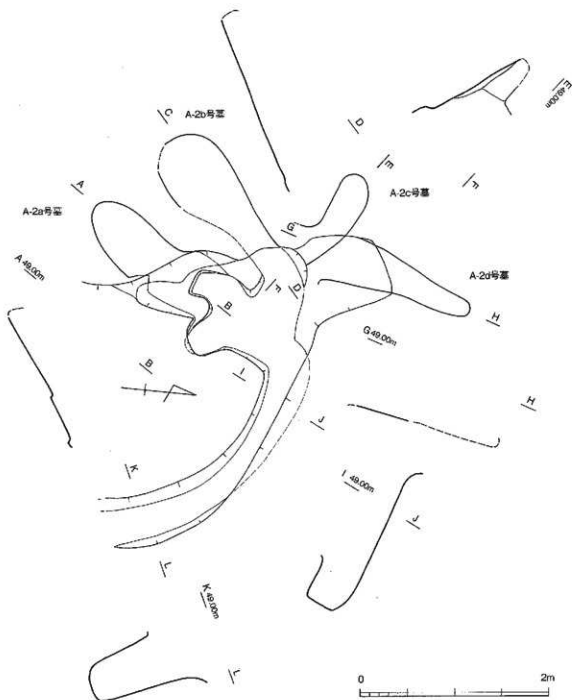
玄室最大幅0.7 m、玄室・羨道の区別が明瞭でなく、全長約1.7 mを測る。天井部は崩落していた。遺物の出土はない。

東A-2c号墓

玄室最大幅0.32 m、全長は、玄室・羨道の区別が明瞭でなく、また、入口部分が大きく破壊されているので明確でないが、床面の段差から判断すれば、約1 mである。天井部も前半部分は破壊されているが、残存部分の天井高は0.3 mある。遺物の出土はない。



第 54 図 東 A - 1 号墓小横穴実測図 (1/40)



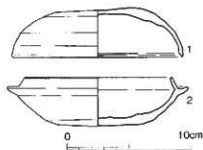
第55図 東A-2号墓小横穴実測図 (1/40)

東A-2d号墓

掘り込まれた基盤が軟弱で、調査時に掘りすぎたため、詳細は不明であるが、最大幅は0.5m前後と思われる。遺物の出土はない。

東地区表土除去中出土土器 (第56図、図版32)

1は坏蓋、2は坏身で、セット関係にある。1は口縁端部に内



第56図 東地区表土除去中出土土器実測図 (1/3)

傾する面をつくる。2は長さ1.1cmの返りが内傾して立ち上がる。両者とも通常の須恵器坏と同じ調整だが、焼成は土師器で、外面には朱塗りらしき痕跡もみられる。意図的に土師器的な焼成を行っているので、単なる生焼けの須恵器ではなく、いわゆる赤焼須恵器の類だと考えられる。

第3節 墳丘

経塚遺跡が存在する丘陵上で現在確認されている4つの墳丘(3号墳は1次調査で調査済)のうち、1号墳が今回の調査区域内に所在する。1号墳丘は調査時以前に北側及び東側が造成により大きく破壊されていたため、調査は残存していた西側部分を中心として行った(2次調査)。3次調査では、2次調査時のトレンチを前後に拡張し、また、北西の尾根上に新たにトレンチを設定して、土層観察を行った。結果として、1号墳丘の北西にわずかな高まりがあり、土層観察からこれも墳丘であることを確認し、5号墳丘とした。

1 1号墳丘(第57図、図版18～20)

丘陵頂部から北へのびる尾根上の端部に位置する。北・東側が破壊されていたため全体の平面形は不明であるが、北側は北1号墓の前庭部が墳丘に食い込む形で掘削されているので、この部分がえぐれた楕円形を呈するものと思われる。南側は墳端が明瞭でないが、東側・西側では墳端と思われる地山岩盤の落ちと、流土と思われるレンズ状の堆積を検出した。このラインが墳端とすると、東西径約50mになる。

西側では、2トレンチ断面、及び緩線上の6トレンチ断面で墳端と思われる地山の落ちを検出しており、墳丘造成にあたって地山を加工していると推測される。6トレンチでは5号墳丘との間にレンズ上の自然堆積が見られる。

墳丘盛土は、トレンチ断面で観察したところでは、橙褐色土と暗灰色土の互層になっており、人工的な盛土であることは明らかである。ただし、互層はあまり整然としたものではなく、かなり乱雑である。

墳丘下には、石蓋土壌墓群が存在するが、トレンチ断面の土層を観察すると、その墓壇埋土の上に淡灰褐色土の薄い層があり、墳丘造成時の表土層と考えられるので、石蓋土壌墓群の形成と墳丘造成の間にはある程度時間差があったものと考えられる。

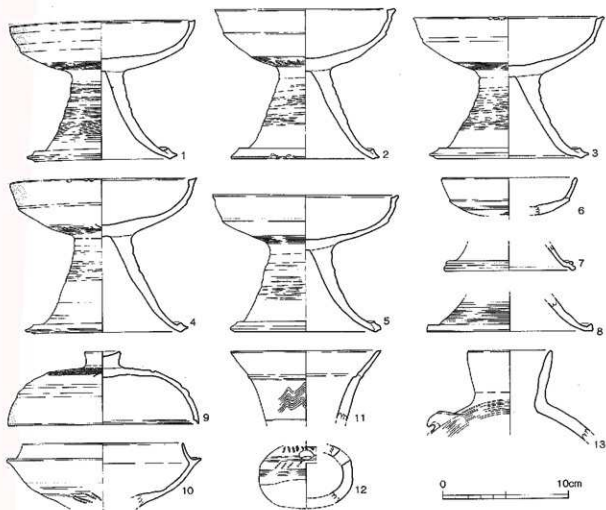
墳丘中には主体部は検出されず、北1号墓のほぼ真上に位置することから見て、この横穴墓に伴う墳丘と推測される。

1号墳丘のトレンチからは土器と鉄器が出土した。特に2次調査時の1トレンチの墳丘盛土中から高坏がまとまって出土しており、墳丘築造儀礼を行っていたことが推測される。

出土遺物

土器(第58・59図、図版20・33・34)

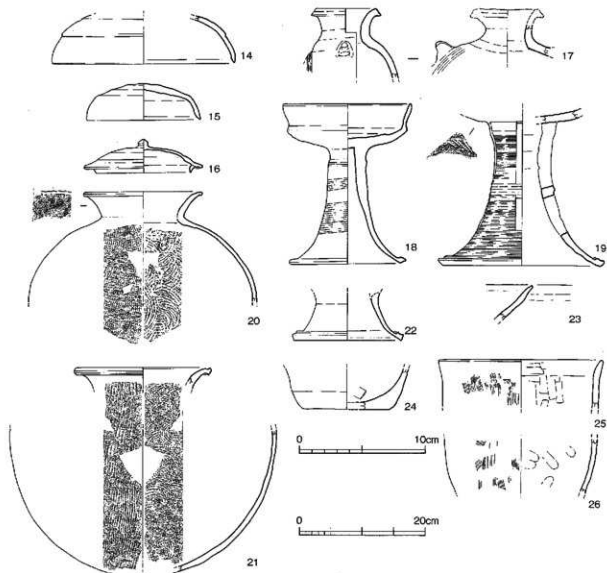
1～13は2次調査、14～26は3次調査出土土器であり、1～5・24は1トレンチ(1号墳丘中南側)、6～13・16・17は2トレンチ(1号墳丘中西側)から出土した。1～5は高坏であり、1トレンチ内からまとまって出土した。器形はいずれも同様で、坏部中ほどに段をもち、やや内湾して外へ開く口縁の端部には緩い凹みをもつ面をつくる。脚部も坏との接合部より外傾して、端部に貼



第58図 1号墳丘トレンチ出土土器実測図① (1/3)

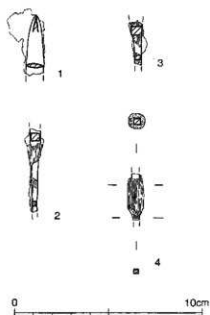
付した粘土帯には凹みをもった面をつくっている。調整も、坏部底部外面にカキメの上に刺突文、脚部外面には全面にわたってカキメを施してほぼ同様だが、生焼である5については、坏部底部の刺突文がみられない。器面の装飾が、焼成方法によって異なっていることがわかる。6～8も高坏で、6は坏部、7・8を脚部とした。いずれも1～5と異なる形態の高坏で、出土位置も異なっている。6については、口径が小さく器壁も薄いが、外面中ほどの段と底部のカキメ・刺突文は、1～5と同様である。なお、図示し得なかったが、1号墳丘中西側の2トレンチからは土師器の高坏が出土しており、坏底部片に一部カキメがみられるため、いわゆる赤焼須恵器も墳丘内から出土している。9・10は有蓋高坏である。9は蓋部で、天井に径2.6cmのつまみがつく。体部にはゆるい沈線が2条めぐり、天井部にはカキメの上に2段の刺突文が向きを変えて施されている。

11・12は甕である。11は口縁部片で、大きく外傾する口縁の端部は丸く収める。頸部には粗い波状文が2段残っている。12は胴部片である。2段の刺突文が向きを変えて施され、斜め上から孔が1つ穿たれている。13は提瓶であり鍵状の耳が一つ残されていたが、破片のため全体の復元はできなかった。耳は側面中央よりやや腹部側につけられており、腹部にはカキメが施されている。



第59図 1号墳丘トレンチ出土土器実測図②
(20・21・25・26は1/6、その他は1/3)

14～16は坏蓋であり、16はつまみがつくものである。14は部分的にカキメを残すことから、有蓋高坏の蓋の可能性はある。口縁端部内面には面をつくっている。15の天井部外面は、回転ヘラキリのままである。17は提瓶である。肩部には鍵状の耳が1ヶ所残るが、本来は1対(2ヶ所)あったと思われる。腹部には一部カキメが残る。18・19は高坏である。18の坏部にゆるい段をつくり、口縁部が外傾して立ち上がる。脚部には粗いカキメがみられる。19は脚部片で、外面にカキメを施す。2段の長方形透孔を四方向に穿っている。坏底部が若干残っており、粗い刺突文を施している。20・21は甕である。20は胴部最大径が中ほどにあり、頸部外面にカキメ、胴部外面にタタキ、内面に円形当具痕が残る。21は口縁部と胴部片



第60図 墳丘トレンチ
出土鉄器実測図(1/2)

である。口縁端部を上方につまみ上げ、胴部外面はタタキ後にカキメを施し、内面には円形当具痕が残る。1号墳丘のほか西D-1号墓道からの破片も接合している。22は脚部片である。端部を上方につまみ上げている。

23・24は土師器である。23は坏口縁部で、24は碗底部である。25は円筒埴輪である。復元口径は26.0cmで、口縁部がやや外傾する。内面はケズリで、口縁部付近は横方向、体部は縦方向である。外面はタテハケである。26は土師器甕としたが、円筒埴輪の可能性もある。外面にはタテハケが残り、内面はナデとケズリを施す。

鉄器（第60図、図版38）

鉄器が1号墳丘中西側（2トレンチ）より出土した。1～4は鉄鏃である。1は刃先片である。2～4は茎部で、木質が残存している。

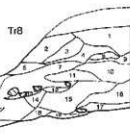
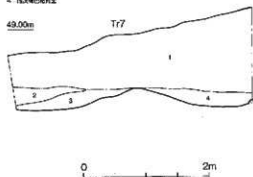
2 5号墳丘（第57・61図、図版20）

1号墳丘の北西に隣接し、1号墳丘から北西に伸びる尾根の支脈上に位置する。調査時以前に北側はすでに破壊されていたので全形は不明であるが、残存部分から推測すると不整楕円形になるものと推測される。

6トレンチの断面観察から、墳丘盛土断面の東側では、淡橙黄色土・暗灰色粘質土・暗黄灰色土が互層になっており、1号墳丘との間のレンズ状堆積とは明確に区別できたので、人工的な墳丘と判断した。トレンチ断面の西側では、互層が次第に不明瞭になり、一様な淡橙黄色土になるため、明瞭な墳端は確認できなかった。そのため、明確な規模は判明しないが、等高線から判断すると長さ4～5m程度と考えられる。

墳丘中及び墳丘下には主体部は検出できなかったが、これも横穴墓に伴う墳丘と判断した。西C-2a号墓がほぼ真下に近いので、それに伴う墳丘である可能性が考えられる。ただし、破壊された尾根の北側部分にも横穴墓が存在した可能性を否定しえないので、断定はできない。

T7土層説明
1: 淡黄灰色土
2: 暗灰色粘質土
3: 淡黄灰色粘質土（局部部）
4: 灰褐色粘質土



T8土層説明
1: 淡黄灰色土
2: 暗灰色粘質土（1より数センチ厚）
3: 灰褐色土
4: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
5: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
6: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
7: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
8: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
9: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
10: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
11: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
12: 灰褐色粘質土
13: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
14: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
15: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
16: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
17: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
18: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
19: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
20: 灰褐色粘質土（1より数センチ厚）
21: 灰褐色粘質土

第61図 5号墳丘トレンチ土層断面図（1/60）

第4節 箱式石棺墓・石蓋土墳墓・土墳墓

1 箱式石棺墓

(1) 1号箱式石棺墓(第63図、図版21)

1号墳丘から北西にのびる尾根の支脈上の端部に位置する。調査時には不自然なくほみがあり、何らかの遺構の存在を予想していたが、6トレンチの掘削により蓋石を検出し、その存在を確認した。くほみは、盗掘孔と思われる。

石棺は、両小口が1枚、北西側が3枚、南東側が2枚の板石で構成されている。地山岩盤を床面としており、敷石等は見られない。人骨は残っていなかったが、北東側小口が若干大きく、頭位方向と考えられる。北東側の、大型の蓋石に覆われていた部分の側辺の蓋石と接する部分には密閉のための粘土が残っていた。

蓋石は、北東側が大きく、石棺のほぼ半分を覆う。南西側は盗掘により動かされており、やや小型の板石と塊石が見られたが、隙間から流入した土砂により埋まっていた。蓋石内面の石棺部分と、石棺内面には赤色顔料が塗布されていた。

棺内からは遺物の出土はないが、北側棺外の密閉粘土中から袋状鉄斧が出土した。

出土遺物(第62図、図版21・38)

1は袋状鉄斧である。袋部は変形した楕円形で、一部木質が残る。刃部はやや楕円形で、部分的に欠損している。

2 石蓋土墳墓

2次調査では1号墳丘直下に石蓋土墳墓を1基(1号)、3次調査では3基(2～4号)を検出した。

(1) 1号石蓋土墳墓(第64図、図版22)

1号墳丘直下で検出された石蓋土墳墓である。二段掘りで、頭位はN-70°-Eである。墓壇は、長軸2.07m、短軸1.11mの長方形で、主体部は主軸に沿って長軸1.64m、短軸0.34～0.22m、深さ0.32mを測る。蓋石は5枚の板石を用い、石の隙間は粘土で目張りしている。主体部内と蓋石内側には朱塗りの痕跡がみられた。墓壇の主体部外より、鉄器が1点出土した。

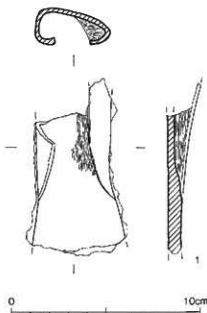
出土遺物(第65図、図版38)

1はピンセット状の鉄器である。0.3×0.9mmの断面長方形の鉄器を折り曲げているが、先端部は欠損していて、大部分が錆びているので、全容は不明である。

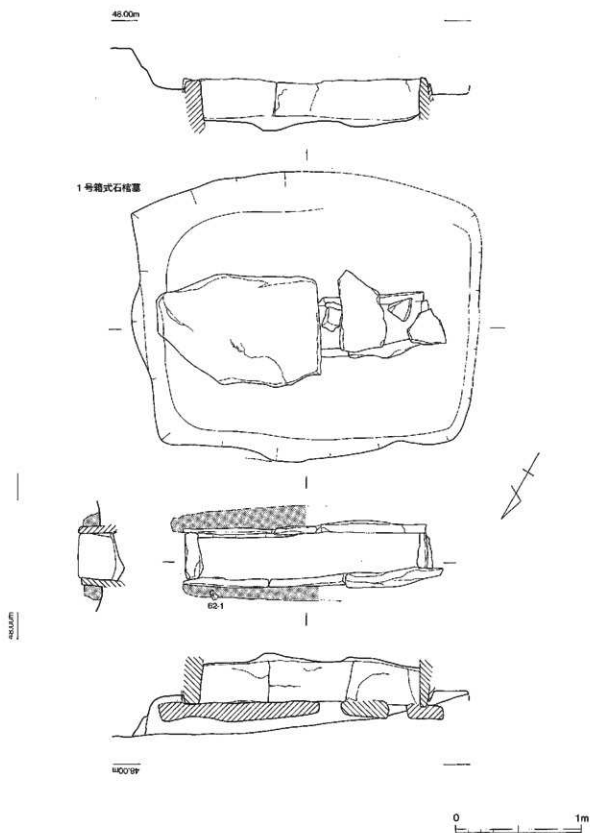
(2) 2号石蓋土墳墓(第64図、図版22・23)

1号石蓋土墳墓と並列して検出された。これも二段掘りになっており、岩盤を掘削して形成された墓壇の床面に、主体部の土墳墓を掘削し、石蓋で覆っている。

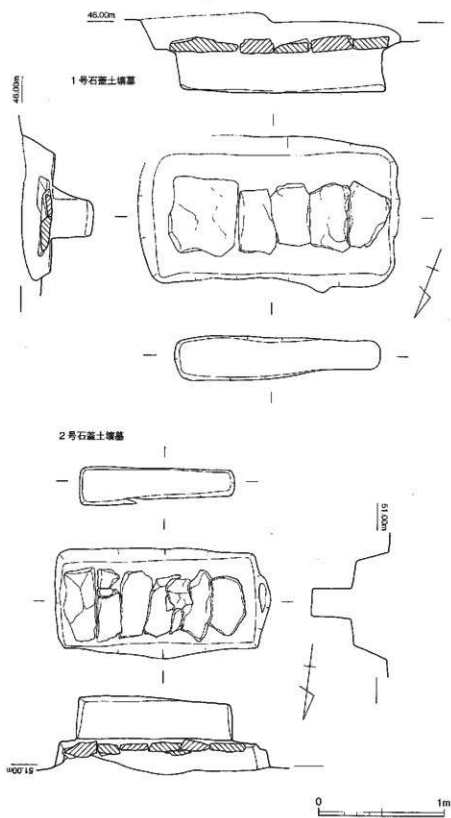
墓壇は、主軸長1.66m、東小口幅0.78m、西小口幅0.75mで、2号及び後述する4号と比較してやや小さめである。蓋石には、6枚の大き目の板石とその隙間を埋める小型の板石が用いられて



第62図 1号箱式石棺墓
出土鉄器実測図(1/2)



第63图 1号箱式石棺墓实测图 (1/30)



第64図 1号・2号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

いる。

主体部は、主軸長 1.23 m、東側小口幅が 0.31 m、西側小口幅が 0.2 m を測り、東側が頭位と考えられる。主体部北側辺は土圧で内側にせり出している。主体部の深さは東側が 0.34 m、西側が 0.29 m を測る。造り出しの枕は見られない。

主体部、墓塋とも遺物・人骨の出土はなく、赤色顔料の塗布も見られなかった。

(3) 3号石蓋土塋墓 (第66図、図版23)

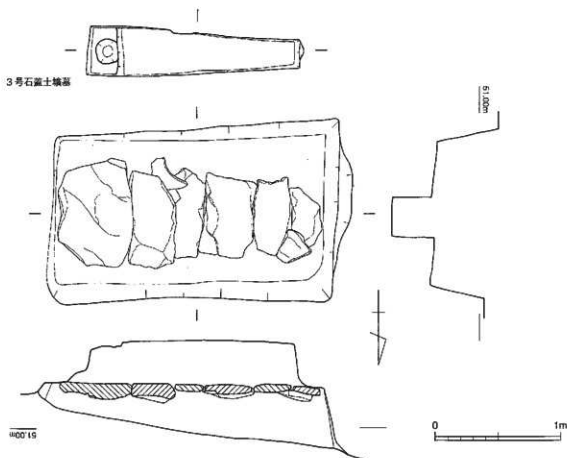
最も東側に位置する。これも二段掘りになっており、岩盤を掘削して形成された比較的大きな墓塋の床面に、主体部の土塋墓を掘削し、石蓋で覆っている。蓋石には、6枚の大きさの板石とその隙間を埋める小型の板石が用いられている。

墓塋は、検出面で、主軸長 2.26 m (推定)、西側小口幅 1.46 m、東側小口幅 1.24 m で西側が広い台形状を呈する。最も深い西北角の肩から床面まで約 0.48 m ある。

主体部は、主軸長 1.68 m、西側小口 0.23 m、東側小口幅 0.4 m を測る。東側小口が大きいので、こちらが頭位方向と考えられる。主体部の深さは、西側が 0.32 m、東側が 0.16 m を測り、東側小



第65図 1号石蓋土塋墓
出土鉄器実測図 (1/2)



第66図 3号石蓋土塋墓実測図 (1/30)

主体部・墓竈とも遺物・人骨の出土はなく、赤色顔料の塗布も見られなかった。

3 土墳墓

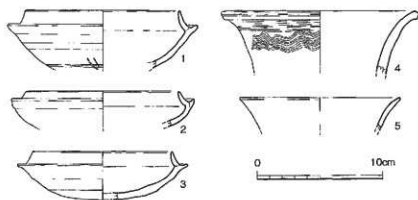
(1) 1号土墳墓 (第68図、図版24)

主体部を直接岩盤に掘り込んでおり、二段掘りではない。全長1.62m、頭部幅0.35m、脚部幅0.2m、検出面から底面までの深さ約0.2mである。遺物は出土していない。

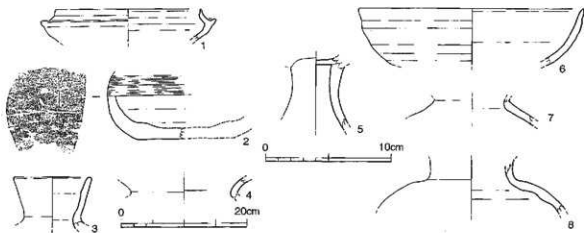
その他の出土遺物

2次調査表探土器 (第69図)

1は有蓋高坏の坏部である。長さ1.6cmの返りが、やや外湾気味に内傾して立ち上がる。底部外面にはカキメ後に刺突文を施す。2・3は返りのある坏身である。3の底部外面は回転ヘラケズリを施す。4は甕の口縁部片であり、口縁端部に2条の沈線を巡らす。頸部にはカキメ後に粗い波状文を施す。5は甕口縁部片である。



第69図 2次調査表探土器実測図 (1/3)

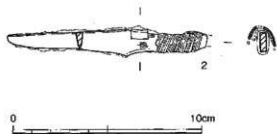


第70図 3次調査表探土器実測図 (4は1/6、その他は1/3)

3次調査表探遺物

土器 (第70図)

1は坏身片であり、内外面とも回転ナデを施す。2は提瓦片であり、腹部に細かいカビメを残す。底部外面にはヘラ描き文がみられるが、ヘラ凸号と判別しにくい。3は口縁部片で、平瓶のものとしたが、全容は不明である。4は甕の頸部片だが、天地逆の可能性もある。



第71図 表探鉄器実測図 (1/2)

5～8は土師器である。5は高坏脚部片、6は碗の口縁部片である。7・8は甕の頸部から肩部片で、の外面には黒斑がみられる。

鉄器 (第71図、図版38)

1は鉄鍔である。主頭類で筥被部は鈍角である。基部に一部樹皮巻の痕跡が残る。2は刀子で、口金具が付着し、基部には樹皮巻と木質が残る。

第 1 表 土器等觀察表

單體名稱: 1,2-萘二羧酸二酐

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第 2 表 鉄器観察表

単位:cm()は推定

調査番号	調査箇所	出土状況	材質	形状	厚	長さ	幅	重	寸法	重量	年代	備考
第705-1	Ⅲ区35	北11号墓支室	鉄板					(6.0)				底部のみ、木質残
第705-2	Ⅲ区35	北11号墓溝	馬具					(28.0)				片断状(2部)～板状
第705-3	Ⅲ区35	北11号墓溝	馬具					(22.5)				片断状(2部)
第1968-1	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	鉄板	三角状	短角	直角		15.4		8.7	5.2	平造、木質残
第1968-2	Ⅲ区35	西B-2号墓	鉄板	三角状	短角	直角		(10.4)		5.0	(3.1)	平造、墓部木質残
第1968-3	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	鉄板		短角			(8.9)				
第1968-4	Ⅲ区35	西B-2号墓支室	鉄板		短角			(5.4)		(4.5)	(0.9)	
第1968-5	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	刀子					(4.9)				
第1968-6	Ⅲ区35	西B-2号墓支室	刀子					(3.8)	10.6		(3.2)	横口金具、木質残
第1968-7	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	刀装具					3.0				横口金具、木質残
第1968-8	Ⅲ区35	西B-2号墓支室	馬具					(4.5)				鍍金品
第1968-9	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	鉄刀					(45.0)				刀部のみ、木質残
第1968-10	Ⅲ区35	西B-2号墓支室(流入土)	鉄刀					(18.1)				刀一残、木質・樹皮巻残
第2068-1	Ⅲ区36	西C-2号墓支室	鉄板	短角				(15.0)		(1.3)	(13.7)	
第2068-2	Ⅲ区36	西C-2号墓支室供品	鉄板			不明		(10.4)			4.9	鉄部木質・樹皮巻残
第2068-3	Ⅲ区36	西C-2号墓支室供品	鉄板			不明		(7.9)			(2.7)	鉄部木質残
第2068-4	Ⅲ区36	西C-2号墓支室供品	刀子		直角			14.3	8.8		5.5	鉄部木質残
第2068-5	Ⅲ区36	西C-2号墓支室(流入土)	馬具					(4.3)				引手金具
第2068-6	Ⅲ区36	西C-2号墓支室(流入土)	馬具					(13.9)				引手金具
第2068-7	Ⅲ区36	西C-2号墓支室(流入土)	馬具					(10.4)				引手(一輪)
第2068-8	Ⅲ区36	西C-2号墓支室(流入土)	馬具					13.0				轡
第2068-9	Ⅲ区36	西C-2号墓支室	馬具					(5.1)				内面に木質残
第4781-1	Ⅲ区37	西D-1号墓支室	鉄板	半圓板	不明			(7.4)				
第4781-2	Ⅲ区37	西D-2号墓溝	鉄板	工型板	不明	鈍角		(10.0)		(7.9)	(2.1)	平造
第4781-3	Ⅲ区37	西D-3号墓支室(流入土)	鉄板	工型板	不明			(7.4)		6.0	(1.4)	平造
第4781-4	Ⅲ区37	西D-3号墓支室	刀子		不明			(14.2)	9.5		(4.7)	鉄部木質残
第6001-1	Ⅲ区38	1号墳B2トレンチ	鉄板	長方形				(3.3)				黄丸造中
第6001-2	Ⅲ区38	1号墳B2トレンチ	鉄板					(4.4)				鉄部木質残
第6001-3	Ⅲ区38	1号墳B2トレンチ	鉄板					(2.2)				鉄部木質残
第6001-4	Ⅲ区38	1号墳B2トレンチ	鉄板					(9.4)				鉄部木質残
第6001-5	Ⅲ区38	1号墳式石室跡日除軸土	鉄片					(9.4)				袋状残
第6001-6	Ⅲ区38	1号墳式石室跡	(不明)					(5.4)				丸造中欠損
第7181-1	Ⅲ区38	表層(1次調査)	鉄板	工型板	不明	鈍角		(9.7)		6.5	(0.8)	平造、樹皮巻残
第7181-2	Ⅲ区38	表層(3次調査)	刀子					10.6	4.3		4.3	木質・樹皮巻残、押1金具

第 3 表 耳環・玉類観察表

単位:cm

調査番号	調査箇所	出土状況	材質	形状	長さ	幅	厚	重量	年代	備考
第2181-1	Ⅲ区39	ⅢD-2号墓	耳環	勾玉金環	3.2×3.0	1.5×1.7		0.7		
第6001-1	Ⅲ区39	ⅢD-3号墓支室	耳環	勾玉金環	2.4×2.7	1.4×1.7		0.5		
第4001-2	Ⅲ区39	ⅢD-3号墓支室	碧玉	碧玉					1.0	2.5

第3章 まとめ

横穴墓

経塚遺跡が所在する丘陵は、造賀川流域でも横穴墓が密集する地域である。現在、約150基の横穴墓が確認されており、1次調査で35基（註1）、今回報告した2・3次調査で24基（小横穴を含む）計59基が調査された。調査はほんの一部なので、全て調査すると150基を超えることは疑いない。今回調査した丘陵北端部では、北側斜面に1群（北1号墓群）、西側斜面に4群（西A～D号墓群）、東側斜面では小横穴で構成される1群（東A号墓群）の横穴墓を検出した。ただし、西D号墓群と東A号墓群は一部調査区外に広がっていて、全容が不明である。これら横穴墓はほとんどが丘陵の標高約45m以上に築造され、下段には築造されていないようである。

1) 平面プラン

①玄室 玄室のサイズについて、横幅及び奥行がともに2mを越すものは、北1-1号墓（幅×奥行：2.3×2.05m）、西A-1号墓（2.15×2.2m）、西B-2号墓（2.66×2.8m）、西C-1号墓（2.96×64m）、西C-2a号墓（2.64×2.3m）、西D-3号墓（2.48×2.16m）であり、いずれも各墓群で主室と呼ぶべきものである。形態については横長気味の玄室がほとんどで、田川地域の横穴墓は周縁沿岸部の影響による横長プランの玄室が地域的特徴の一つと考えられており（註2）、今回調査した横穴墓についても、ほぼ同様の傾向がうかがわれる。その中で、西B-2号墓だけはやや縦長をしている。西B号墓群の玄室については全てが片袖であり、今回調査した横穴墓の中では特徴的である。玄室プランは、横長の略方形とやや台形を呈するもの（北1-3号墓、西A-1号墓、西C-1号墓）に大別され、略方形から台形に変遷するものと考えられる。

また、西D-2a号墓は、今回調査した横穴墓の中で唯一の複式である。前室・後室ともやや小ぶりの玄室であるが、後室玄門部には装飾を施すなど、丁寧なつくりである。

②墓道 今回調査した横穴墓は、原則として一つの玄室に専用の墓道が築造されており、小横穴墓道側壁につくられる。北1-3号墓と西B-1a号墓は主墓室（北1-1号墓、西B-2号墓）の墓道から派生して墓道を取り付けており、一部共有している。西A-1号墓は一墓道一墓室で、西D-1・3号墓も一墓道一墓室のものがまとまって群を構成する。

2) 羨門部構造

羨門部の構造は様々な形態のものがみられる。飾縁は北1-1号・1-3号墓と西D-2a号墓にみられる。石室墳の羨門を模倣した庇石が西C-1号・D-1号・D-2a号・D-3号墓に用いられ、うち西D-1号は石組側壁の上に架けられている。その他、北1-1号墓・西C-1号・D-3号墓のように石組の代りに土柱を削り出すなど、石室墳を意識した羨門部の構造となっている。

また、羨道については、西A-1号・C-1号・C-2a号墓が2.5mを越す長さとなっている。玄室の天井高を確保するため、斜面の傾斜が緩い場所など、地形に応じて羨道の長さを変化させている。

3) 時期変遷

各群の玄室プラン及び構造から推測される各群での横穴墓（小横穴を除く）の築造順位は以下のとおりと考えられる。

北1号墓群：1-1号墓→1-3号墓（※玄室プランが略方形→台形で小型化）、西A号墓群：A-1

号墓のみ、西 B 号墓群：B-2 号墓→B-1 号墓（※玄室プランが小型化）、西 C 号墓群：C-2 号墓→C-1 号墓（※玄室プランが略方形→台形）、西 D 号墓群：D-1 号墓・D-3 号墓→D-2 号墓（※D-1 号と D-3 号墓の間に D-2 号墓が築造）

各群での築造の契機となった主墓室は、いずれも前述したとおり、規模の大きな玄室である。加えて、北 1 号墓道（おそらく北 1-1 号墓への副葬品）、西 B-2 号墓、西 C-2a 号墓、西 D-1 号墓、西 D-3 号墓の玄室内から鉄器が出土していることも、この順位が支持されよう。

なお、出土した須恵器から、今回調査した横穴墓は、九州須恵器編年でⅢ B～Ⅳ B 期に使用されたものと考えられる。出土した馬具についても TK209～217 型式期の特徴を持つ（註 3）。

（4）墳丘をもつ横穴墓

経塚遺跡が所在する丘陵では、現在 4 基の墳丘が確認されており、3 号墳については 1 次調査で古墳時代前期の主体部が調査されている（註 4）。今回の調査では、対象となった 1 号墳のほか、新しい墳丘も確認された（5 号墳）。いずれも、墳丘の主体部については、1 号墳が北 1 号墓、5 号墳が西 C-2a 号墓（推定）といった、横穴墓にともなう墳丘であると考えられる。近年遠賀川流域では、石室墳と横穴墓との関係を考える上で、横穴墓にともなう墳丘が一つの指標となって議論されており（註 5）、今回の調査で新しい事例を追加することとなった。

1 号墳丘は、地山成形後に乱雑な盛土を積み上げ、墳丘を築造する。特筆すべきは、墳丘盛土から出土した遺物群で、墳丘築造にともなう祭祀の痕跡を示している。基本的に供献具に使用された土器が中心だが、鉄鍬も出土しており、祭祀に鉄器が使用された可能性がある。いずれにせよ、墳丘（祭祀を含む）、羨門部など、石室墳に劣らない構造が横穴墓にも見られることは明らかである。

なお、北 1-1 号墓と西 C-2a 号墓については、規模と馬具などの副葬品にあわせて墳丘をもつものと推測されることから、経塚遺跡でも最上位の横穴墓と考えられる。

2 土器について

地元の方々のお話によると、経塚遺跡では過去盗掘が幾度なくなされており、当時の副葬品の大部分は失われたとのことである。それでも、馬具・鉄刀等の鉄製品が今回の調査で出土しているが、出土遺物の大部分は土器が占めている。

今回調査分で出土した須恵器は、ほとんどが九州須恵器編年のⅢ B～Ⅳ B 期の須恵器と土師器である。しかしながら、須恵器と土師器の間ともいえる、いわゆる「赤焼土器」も少量出土している。赤焼土器の製作背景については、従来から様々なパターンが想定されている（註 6）。今回出土した赤焼土器から、①土師器製作者（または須恵器非熟練者）が須恵器を製作、②須恵器製作者が土師器的に土器を製作、という二つのパターンを考えた。①は土師器的な焼成に稚拙な調整（文様）を施すものである（50 図-2）。また、1 号墳丘トレンチから一括して出土した高坏のうち、単に生焼としたもの（58 図-5）は、他の高坏に比べて文様が省略されており、文様の精粗が焼成の良不良に対応しているため、非熟練者の手によるものと考えられる。②は、横穴墓という非日常的な空間に応じるため、製作技法は須恵器だが、焼成を故意に土師器的に行うものである（16 図-1、26 図-18）。特に、東地区で出土した坏壺と坏身（56 図-1・2）は、須恵器的技法を施した坏に、土師器的な焼成を行い、さらに外面には朱塗りの痕跡がみられる。葬祭用の土器として、意図的に赤色を意識したのと考えられる。

3 箱式石棺墓・石蓋土墳墓・土墳墓

これらは、経塚遺跡で初めて確認された墓制である。経塚遺跡が所在する丘陵北端の頂部に、石蓋土墳墓4基と土墳墓1基、やや離れて箱式石棺墓1基が今回検出された。主軸方位は北東～東だが、4号石蓋土墳墓1基のみ南西である。1・3号石蓋土墳墓と1号土墳墓が東西方向へ1列に並ぶ。箱式石棺墓・石蓋土墳墓の墓域はほぼ長方形で、蓋石については、1～3号石蓋土墳墓は5～6枚用いるのに対し、1号箱式石棺墓と4号石蓋土墳墓は、1枚のみ大型の蓋石を用いる。前者については、田川地域では香春町古坊遺跡（註7）で類似のものが検出されている。出土遺物が少なく時期比定の根拠に乏しいが、古坊遺跡と同様に弥生時代終末から古墳時代にかけての範囲と考えられる。

4 おわりに

大規模な横穴墓群である経塚遺跡では、調査によって徐々に詳細が明らかになりつつある。横穴墓に伴う墳丘をはじめ、箱式石棺墓・石蓋土墳墓・土墳墓など多様な墓制が展開しており、田川地域の古代を語る上で、重要な遺跡であることを再確認した。

しかしながら、これまでの発掘調査は、残念ながら開発によって消滅する遺構を対象としてきた。調査によって明らかになることを代償に、失われていった埋蔵文化財も少なくない。

今回の発掘調査は、時間の制約上十分な調査であるとは言いが、報告書によって経塚遺跡が記録保存され、広くご活用いただければ幸いである。

なお、3次調査分の遺構については、遠賀川流域の市町が合同で長年開催している「遠賀川流域古墳同時公開」にて現地説明を行い、多くの方々に見学していただいたことを、付記しておきたい。

【註】

- (1) 田川市教育委員会 1999「経塚横穴墓群・古墳群」田川市文化財調査報告書第9集
- (2) 長谷川清之 2001「筑前東部における横穴墓の概要」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
- (3) 松浦宇哲氏（嘉麻市教育委員会）ご教示による
- (4) 註1に同じ
- (5) 遠賀川流域文化財学習会 2007「遠賀川流域の横穴墓」
- (6) 橋口達也 1989「似非土師須恵器」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官論文集Ⅰ、など。遠賀川流域のいわゆる「瓶俵環」の動向は、福本寛 2007「遠賀川流域の横俵環について」『西健一郎先生退官記念論集』参照
- (7) 福岡県教育委員会 2006「古坊遺跡 高野ムカエ遺跡」福岡県文化財調査報告書第206集



遠賀川流域古墳同時公開
での現地説明会

圖 版



北1号墓群



北1-1号墓玄室



北1-2号墓



北1-3号墓玄室



西側斜面（調査前）



西A-1号墓道（東から）



西A-1号墓玄室



西B-1号墓遺物
出土状況①



西B-1号墓遺物
出土状況②

図版 4



西B-1号墓道遺物
出土状況③



西B-1a号墓玄室



西B-1a号墓・
B-1b号墓



西B-1b号墓



西B-1b号墓・
B-2号墓



西B-2号墓玄室



西 C - 1 号墓道土層

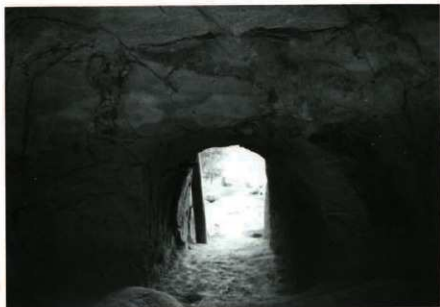


西 C - 1 号墓羨門



西 C - 1 号墓玄室①

西C-1号墓玄室②
(玄室から羨道)



西C-2号墓道土層



西C-2a号墓
検出状況





西 C - 2a 号墓美門



西 C - 2a 号墓玄室

西C-2c号墓
検出状況

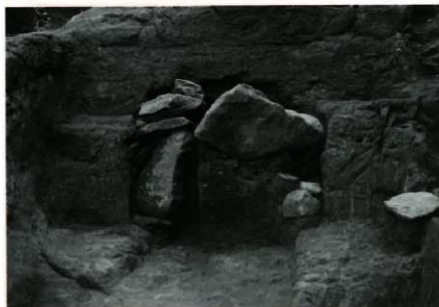


西C-2b号墓・
C-2c号墓



西D-1号墓道土層





西 D - 1 号墓検出状況



西 D - 1 号墓羨門



西 D - 1 号墓女室①

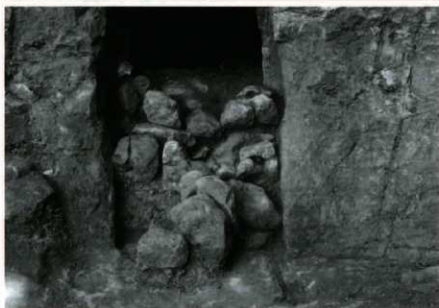
西D-1号墓玄室②
(玄室から羨道)



西D-2号墓道土層



西D-2a号墓検出状況





西D-2a号墓羨門



西D-2a号墓玄室①
(前室・玄室)



西 D - 2a 号墓玄室②
(玄門部の装飾)



西 D - 2b 号墓



西D-2c号墓



西D-3号墓美門



西 D - 3 号墓道土層



西 D - 3 号墓羨道



西 D - 3 号墓玄室①



西 D - 3 号墓玄室②
(玄室から羨道)



東 A - 1 号墓群



東 A - 1 a 号墓

東A-1b号墓



東A-1c号墓・
A-1d号墓



東A-1e号墓





東 A - 1 号墓群・
A - 2 号墓群



東 A - 2 号墓群



1 号墳丘土層

1号墳丘北側墳端部



1号墳丘東側墳端部



1号墳丘（調査後）





1号墳丘盛土遺物出土状況



1号・5号墳丘盛土土層



5号墳丘（調査後、南から）



1号箱式石棺墓
検出状況



1号箱式石棺墓
蓋石除去状況



1号箱式石棺墓
鉄器出土状況



1号石蓋土墳墓検出状況



1号石蓋土墳墓
蓋石除去状況



2号石蓋土墳墓検出状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうづかいせき2							
書名	経塚遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田川市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	福本 寛 田代健二							
編集機関	田川市教育委員会							
所在地	〒826-0031 福岡県田川市千代町6番3号							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうづかいせき 経 塚 遺 跡	ふくおかけん 福岡県 たがわし 田川市 大字伊田 2011、他	402061	060095 060078 } 060147	33° 38° 14.3°	130° 49° 43.8°	2004.3.1 } 2004.3.31 2006.12.1 } 2007.5.30	約500㎡	開発に伴う緊急調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
経 塚 遺 跡	墳 墓	弥生～古墳 古墳時代後期		箱式石棺墓、石蓋土壊墓、土壊墓 横穴墓 墳丘		鉄器 須恵器、土師器、鉄器、耳環、玉類など		

田川市文化財調査報告書

第13集

経塚遺跡Ⅱ

平成23年3月31日

発行 田川市教育委員会
田川市千代町6番3号

印刷 有限会社 川崎印刷
田川市大字伊出2713-45

